

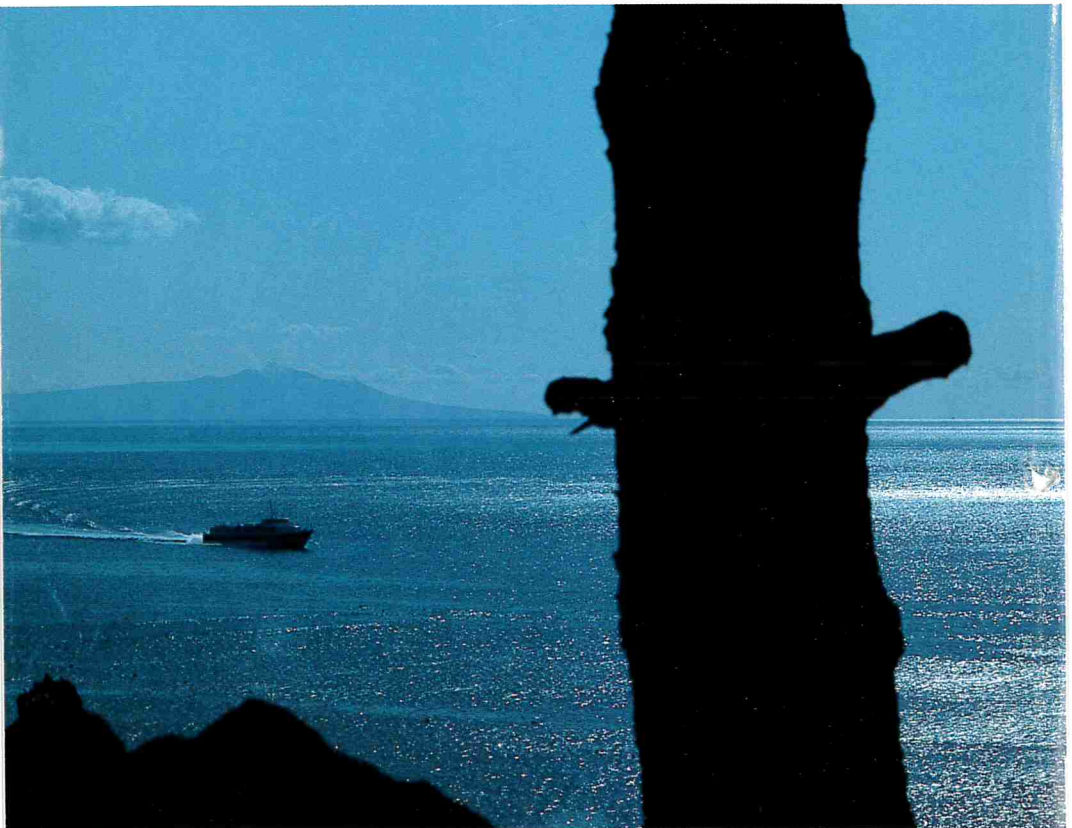
郷

平成元年
3月号

友

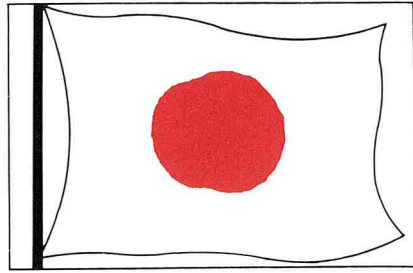
1989
March

昭和三十一年五月八日
平成元年三月一日(毎月一回)発行
第三十五卷第三号(通巻四〇九号)



—自然美散策(春の海)—(解説表2下段)

総会の決議を 着実に実行!!



表紙写真の解説

写真家 宝蔵寺 忠

——自然美散策(春の海)——

——静岡県熱海市所在——

「春の海 日ねもす のたりのたりかな」

舞台一ばいにライトを浴びて、春ののどかさを演ずるが如き春の海、これぞ春の主役である。

伊豆熱海温泉での春の一情景である。ここ熱海は背後に山迫り、湯量豊富な温泉地で、湯史は遠く奈良時代にさかのぼり、鎌倉時代から知られた古湯であるが、尾崎紅葉の「金色夜叉」によって一躍全国的に有名となり、現在では四〇〇軒余の宿が山腹の急斜面に階段状にひしめく一大歓楽境として賑わっている。伊豆半島の東側の付根に位置し、前面には風光明眉な相模灘の明るい海が広がり、すぐ前に初島が、また海上八〇軒ほどに伊豆大島の三原山の噴煙を望見する。この一見極楽のような光る海も、突然に荒れ狂い人命を一瞬にして奪う地獄となる。まさに海は両刃の剣ではないか。人の世の様々な事は使い方によっては両刃の剣となり、人を生かすことも、殺すこともできる。

「平成」という新しい御世を迎えて、我が日の本も新たな出発をしたが、必ずしも全てに平成であるとはいえない。春の陽を受け光り輝やく海を見つめ、古人の『南海の彼方に浄土あり』という言葉を考えてみるのも意義なしとは思えない。



「昭和」を偲び「平成」に祈る

昭和天皇の崩御にあたり、ここに重ねて心から哀悼の意を捧げます。

世界先進主要国の仲間入りを目標に軍事主体で、厳しかった昭和初期、苦しくて辛かった復興の昭和中期、経済を主体に、恵まれた繁栄の昭和後期と何れも激動であった昭和の時代を、昭和天皇を中心に仰ぎ日本国・日本民族のために一生懸命に努力してきた日本郷友連盟の大部分の会員は、良きも悪しきも、苦しさも楽しみも昭和とともに生きてきたものであるから「昭和」に対する愛着と感慨は一入強い、特に昭和天皇の御遺徳を偲び奉ることは切なるものがあります。

日本郷友連盟においては、昭和三十一年の創立以来独立国としての日本の安全と繁栄を図るための国防に関する活動を主眼に、併せて英霊の慰霊顕彰と日本の伝統美風の継承に努力してまいりました。特に日本人の優れた精神（心）の函養と拡充を強調してきたことは誇りに思っています。

今「昭和」は終り、その繁栄を継承した「平成」が始りました。今までの日本は周囲を見廻しながら先進主要国集団の中についてゆくことですまされていたが、今後は各国の先頭に立つて、自ら判断し責任ある行動をとってゆく立場になった。したがって日本の体質改善が大切だと言われている。国内的には繁栄の基礎を一層確実なものにし、国際的には日本の国も民族も、その特色を明確にして堅持し、それを基調に他の国々の立場を尊重しつつ国際協調を図ることが重要であります。

このことを考えるとき、日本郷友連盟も郷友理念の顕現に更なる努力が必要であります。同時に平成の時代を担当する人々が天皇后陛下を中心に良き日本を益々充実発させるよう祈ります。

——昭和を送り平成を迎えて——

日本正気の復活を祈る

草 地 貞 吾
(連盟相談役)

昭和の天皇陛下には、昭和六十四年一月七日午前六時三十三分、皇居吹上御所において崩御遊ばされた。このことは一瞬にして全国津々浦々に報道された。同時に地球上全世界に伝播した。

日本国民として哀悼の極みである。世界の人々の多くも敬弔の誠を捧げている。

一方、国の内外において、戦争責任などという、むしろえしの不毛論議が一部にあるようである。それはまだしも、東京裁判史観の横行氾濫には驚ろかされた。識者と思われる人まで、よくあれほど洗脳されたものである。凡ての人が敗戦の事実だけは十分に認識しているが、戦争の真の原因・動機については殆ど無知である。この際、病的被害心理から脱却して、高所大局よりする、天文観測的展望

が期待される。

今日現在もなお、戦後という言葉がまかり通っている。そのこと自体が大東亜戦争の偉大深刻さを物語る。戦前戦後の境界は申すまでもなく昭和二十年八月十五日の終戦の日である。誰が数えても、戦前(戦中含む)の昭和は二十年足らず、戦後の昭和は四十年を越えている。長短は別として、昭和の時代の歴史的最重要事件は大東亜戦争そのものである。いわゆる忠臣蔵事件が平和ボケした元禄時代の中心的話題になっている如く、昭和時代の歴史的テーマは、大東亜戦争を措いて他にない。それは好むと好まざるとを問わず、大きな炬火の如く燦然として輝いている。この不滅の歴史事実は、止むに止まれぬ日本精神の発露であり、日本歴史の痛切な運命でさえあったのだ。

そしてそれが、世界万国現代史の原点・燈明ともなっている。世界今日の世界秩序は、大東亜戦争（第二次大戦）

の結果に俟つものが頗る多いことを銘記すべきだ。ウソと思うなら、戦前と戦後の万国地図を、とくとご覧いただきたい。過去久しきに亘った広大な西欧植民地と数十億の有色人種の解放独立は、殆ど大東亜戦争の産物か、少なくともその影響によるものだ。人類一般が普遍的に希求愛好する自主独立国家の数は、戦前の二倍以上にもなっている。

お隣りの韓国や中国の独立も、大東亜戦争あつたればこそだ。

日本今日の自由・平等も経済的繁栄も、大東亜戦争の余慶の上に成り立っている。三百万英霊は決して無駄死したのではない。いずれも皆、邦家民族のため、大東亜のため、絶大な貢献をなされたのである。

日本共産党などは、一辺倒に大東亜戦争や天皇制を否定しているが、もし、大東亜戦争がなかったら、今なお非合法下に沈んでいることは必定だ。更にまた、天皇崩御に關連して土井社会党は「……苦渋に満ちた昭和……」と、本当に自党そのものが苦渋にあえいでいるかの如き本音をバカバカしくも告白していた。昭和の前半は決して暗黒ではなかった。暗黒と思うのは、戦後の占領政策によって一様に黒眼鏡をかけさせられたからである。

昭和六年、満州事変の生起は、当然なる權益擁護の発動である。

昭和八年、皇太子（新天皇陛下）の御生誕や昭和十五年の皇紀二千六百年祝典は、日本歴史上における民族精神高揚の一面を示したものだ。昭和十六年十二月の大東亜開戦は、完全に米国の挑発によるものである。東京裁判で「あれなら、モナコでも起ち上らざるを得ない……」と、インドのパール判事は、そのものずばり述べている。万一もしも、日本が、あの時点で、この大戦をおめおめ回避したら、当然のこととして大陸から全面撤退し、満州国汪政権はもとより、独・伊友邦の信義一切を裏切ったことになる。現在の米国に「米州に後退せよ」、そしてまたソ連に「ソ連外の地から一切手を引いて自国に引き下がれ」と、言って、それが果して可能であろうか。現にわが北方領土問題さえ、あのとおりではないか。このような不可能無理難題のあつたことは全くかくされて、真珠湾奇襲の映画だけが、大々的に宣伝されている。

大東亜開戦は東条首相の専断でもなく、また軍部の独走でもない。健全な日本国家機構が、凡ゆる情勢を勘考し、衆議を尽くし、万策を講じて策定の上、これを憲法に率由して裁可決定されたものだ。そして全閣僚副署の宣戦の詔勅が公布された。

さればこそ、一億国民は御民われ生ける驗ありの意気込みで、この聖戦に献身したのである。戦後、聖戦意識の消滅が占領政策の眼目であったことを十二分に知るの要がある。

さて、あれほどの大戦が昭和二十年八月中旬、超憲法的の御聖断によって一挙に終結された。さすがに昭々たる日本天皇の御稜威が一段と光っている。そして、この聖断に伴う御処置がまた畏い極みながらお見事であった。

すなわち、八月十五日正午、御自らマイクの前に立ちになり、直接のご放送が行われた。

直ちに戦後処理のため、東久邇宮内閣を発足せしめられた。また朝香・閑院・竹田の三宮殿下を支那・南方・満州(関東軍)・朝鮮の外地総軍に特派し、聖旨の存するところを懇篤に伝宣させられた。

そして天皇には、音無しの構えをもって、しばらく占領(進駐)軍の動静をしつと見守られた。時よしと、昭和二十年九月二十七日、御身を命を賭されて、占領軍総司令官マッカーサー元帥を訪問された。会見時間は僅かに三十分余に過ぎなかったが、陛下の捨身的神の如き品格と言行は、いたくマッカーサー元帥を感動させた。その外交的成果は、当時における日本政府の一月分以上であった。また、暗中模索中であつた対日占領政策の基本(天皇存続)

路線は、この時確定したと言ってよからう。

昭和二十一年年頭には、いわゆる「人間宣言」という勅書が出された。ところが、驚ろくなかれ、その冒頭に五か条の御誓文が、全文載せられている。事新しく、民主などというが、日本には、明治の初年以來、すでにこれほど完備した民主的規範があつたのである。

聖明なる天皇には、この昭和の大変に際会し、改めて明治維新の精神に復帰せよと、全国民に呼びかけられたのである。敵本主義とはこれをいう。おそらくGHQも「人間宣言」という言葉に眩惑され、この勅書の真精神は分からなかつたのではないか。

そして天皇陛下には、御自らの発意で、その年の二月から神奈川県下を皮切りに全国巡幸の途につかれた。もとよりこれは断続的に実行されたのであるが、昭和二十九年の北海道まで、その足跡は四十六都道府県、延べ百六十五日、道程三万三千粁に及んだ。それは時として爆発的ブーム現象にまで高まり、熱狂した群集が「天皇陛下万歳！」と殺到し、警護のMPが悲鳴を挙げるまでになつた場面さえある。これが、

日本天皇の真実在の姿である。

その天皇は、戦後の日本国憲法によって、日本国の象徴と示されている。が、われら本来の日本人からすれば、昔

も今も何ら変りない太陽と同様の御存在であり、日本国の元首であらせられる。

昭和という時代は終わった。昭和のお日様は、悲しくも西方遥かなる天の岩戸におかくれになられた。

だが、うれしくも有難いことに、日本には万世一系の天津日嗣がおいでになられる。千代に八千代に不易なるお日様が新しい平成時代の象徴として、間髪を入れることなく明々と東天に昇り給うた。

明治天皇に

あさみどり 澄み渡りたる 大空の

ひろきをおのが 心とものがな

という、高邁雄渾な御製があられる。

昭和から平成への大御代に生を得たわれら、今こそ日本国民たるの幸福に万福の感謝を捧げ、大東亜聖戦意識の喚起と清明博大な日本正気の復活に最大限の力を尽くそうではないか。

大行天皇崩御に噴出する大和心の美しさを思う



扇 貞 雄

(共産圏動向研究所長
共産圏問題評論家)

大行天皇御崩御に遭遇し、止むに止まれぬ、どうしようもない日本人の大行天皇追悼の悲しみ、忠誠心と言うものを、神戸の一隅に住する一草莽の臣に過ぎない私として、余りにも勿体なく体験させて頂いた事を、同憂の諸先生方に開陳し、恐らく同じ体験を持たれて居られる同志として哀悼の意を分ち度く思う次第であります。

崩御のニュースを聴かれた近くの立正校成会の支部長をして居られる、自分より十数年先輩の同志、次いで生長の家の指導者であり、隣の商店街の衣料品店の老主人が来訪され、弔意を表され、身の引き締る思いをしたので有りますが、両先生共、私の長年の故北方異民族慰霊祭にご参列の同志であるご縁を尊んでご来訪、次々とかかる同志の方々

のお電話、一様に皇居前に弔問御冥福祈願の記帳に参集される無数の民の姿こそ、日本人の本当の姿であると繰返し賛嘆喜びの極、涙ぐんでお帰りになる姿。日をおいて続々と到着する、遠く水戸、山形、宮崎、熊本の未だお顔も拝した事のない、新聞、雑誌の私の拙論に対し、常にご共鳴の意見を寄せられる同志の方々内二人は四十歳以下の若い方も居られ、大行天皇の六十四年の御仁慈を讃える赤誠に、只感激するのみでありました。

又一月十一日、区長主催の例年の灘区民の新年の集いに参会するや、お顔もお名前も存じ上げぬ方々が三三五、私に大行天皇に対する哀悼の意を表しに來られ、「私は先生の本を常に共鳴して読ませて頂いて居る者です」と表明されて恐縮した次第です。

今回の日本人の心根の美しさこそ、凡て貧富、貴賤、老若男女の差別なく湧き上る大和心の美しさである。自ら省みて、徳足らず、智足らず齢七十三歳を数えるに、我子供達にも劣る野人振り、至らざる所許りの私に期せずして表明される哀悼、忠誠の思い、凡そ四十年前の、私の海外勤務十二年間の軍人生活の間にひたむきな殉国精神を多とし、今に変わらぬ信頼を寄せられる同志のみなるに、自ら恥じ入る次第、復員後四十三年、今更、旧軍人の階級等、ふれたくない思いの私の平素の言動に対し、自ら手弁当で、

参謀長役を買って出て、研究所業務を奉仕頂いている年齢こそ私より若いのが有能な、笠原先生や竹矢先生を初めとする、諸同志より事毎に、部外に私の軍歴やら階級を表明されるご活動に対し、常に赤面している者として、今回も研究所幹部の同志より今回の数多くの民草の忠誠心の表明は先生の軍歴を信じての表明であり、今後共、旧軍人たるを表現して頂き度いとの意見具申さえある始末、何と言う純真、無雑、昔に変わらぬ、日本人の本性と言うものが、今般の御不例を機として噴出する大和心の美しさに只々涙するのみの日々でご座居ました。

一部の跳ね返り、非国民の言動をも、圧殺する九十九%の国民の今回の実態を見、如何なる苦難襲いかかろうとも我皇国は絶対大丈夫だの確信の愈々湧き上って来るのを覚えさせた次第である。以て同志の先生方と共にこの思いを謹しんで開陳する次第で有ります。(平成元・1・15記)

訂正

一月号、巻頭言、後から二行目「子規」は「虚子」の誤りにつき訂正します。

図書紹介

一、福富繁著「地獄からの生還」

森松 俊夫

(元防衛庁戦史編纂官)

ビルマ方面最後の、凄惨を極めた第二十八軍(策集団)のシタン作戦、これを「邁」作戦という。軍は、ペグー山系内に機動集結し、遊撃作戦を展開しつつ脱出の機をうかがい、英印軍の完全包囲下からシタン平地を突破し、シヤン高原を南下して、この壮絶な戦いを完遂した。まさに、地獄からの生還である。損害の大部は、交戦によるものは少なく、食糧欠乏と疾病による将兵の体力が極限を超えたためであった。

著者福富繁氏は陸士四十六期生。当初、第五十五師団情報主任、後半、作戦主任参謀としてアキヤブ方面で活躍したのち、昭和十九年一月、第二十八軍創設とともに、同軍作戦主任参謀となり、終戦に至るまで軍のすべての作戦に従軍した。

本書は、邁作戦に焦点を合わせつつ、第二十八軍作戦の全容を述べた実録である。

しかし単に作戦経過を正確に記しただけではない。作戦主任参謀として体験し、見聞した軍内の実情、所見が率直、丹念に綴られている。たとえば重要段階で生じた方面軍との確執や折衝、桜井省三軍司令官統帥の機微、気魄に満ちた岩畔豪雄参謀長以下各幕僚それぞれの言動、各兵团各部隊の健闘と悲惨を極めた各隊実情の描写など、真に血肉に通ずる活きた戦史として人に迫るものがあり、教訓が多い。

迫力ある著者の運筆により、私は、知らず知らず身をビルマ戦場におき、追体験にひたって、暗然となったのであるが、救いとなったのは「余録」である。この余録は、ユーモアさえ含んださまざまなエピソードで、文中の各所に挿入され、興味をそそるとともに、冷静さを取り戻させてくれた。

福富氏のこの力作は、邁作戦の戦史的研究書として高く評価されるばかりでなく、幕僚道、戦場心理、もろもろの錯誤などについても教訓が多い。一読をお奨めする。

日本市民防衛協会内シタン会発行(〒一〇三 東京都中央区日本橋三十五一十二

吉野ビル ☎二七一〇二六二(三) B四版、八十九頁、二〇〇〇円(送料共) 本書は限定版で市販されていない。講読ご希望の向は電話又は葉書で直接同所へ。代金は送本の際同封の郵便振替で。

二、第十五版・再版記念

中野陸軍特務機関長の手記

一、ツンドラの鬼一、〇〇〇円(〒250円)

二、親日国フィンランド化の実態を視る 五〇〇円(〒200円)

三、北中国、極東シベリア秘密戦懐古の旅 四〇〇円(〒150円)

右の売上金は、神戸護国神社参道に鎮る大戦殉難北方異民族(白系ロシア人・ギリヤーク・オロツコ等)慰霊祭の義金に献げられます。多数の方々の購読をお願いします。夫々の定価に郵送料を加算し切手にて次にお申込み下さい。(編集部)

〒657 神戸市灘区水道筋三一〇

扇兄弟社

「東郷さん」の復活

——見直される父祖の足あと——

熊谷八州男

(元中学校長)

福岡県の津屋崎町に東郷神社がある。玄海灘を見降ろす丘の上、桜の名所、東郷公園の中に、小さな社がひっそりと鎮座している。

春、花の季節以外は訪れる人もきわめて少ない。祭神は勿論、日本海海戦に大勝した連合艦隊司令長官・東郷元帥である。

筆者はかつて、高校生をつれてここへ来たことがある。

そのとき、この社の祭神をたずねたが、正確に答えた者はいなかった。ただ一人、「海軍の偉い人を祭っているのだと、おじいさんから聞いています」と言っただけだった。

決戦場、対馬海峡は目の前である。海戦の砲声は殷々としてこの地にとどろいた。住民たちは固唾をのんで運命の決戦を注視した。その模様を語り伝えてきた古老たちも、

今はおおかた鬼籍に入った。

それにしても、あまりの断絶に驚いた筆者は、あわてて日本歴史の教科書を開いてみた。しかしそこに、東郷平八郎という名前はなかった。数冊調べてみたが、ついに見出すことはできなかった。

これに反して、与謝野晶子の「君死に給うことなかれ」の反戦詩は、どの教科書にも囲み記事として出ていた。中学校の教科書を調べてみても全く同じであった。これには二度びっくりだった。

つい二、三年前、十数名の大学生たちと同席したとき、「東郷平八郎」という人物を知っているかどうか、いきなりたずねてみた。手を挙げたのは僅か三名であった。そのうちの一人、女子学生が言った。

「でも、私は鹿兒島の出身ですから」 彼女は郷土が生んだ偉人、「東郷さん」に誇りと愛着を感じているようだった。

東郷提督は驚異的大勝利をおさめ、日露戦争におけるわが国の勝利を決定的にした。世界各国はその勲功を称え、海戦の世界史的意義を正當に評価して今に至っている。

元來日本海軍は、英国海軍を範とし、その戦史戦訓に学んだ。そして東郷提督は、ネルソンのトラファルガル海戦をしのぐ大勝利を獲得した。そのため、東郷提督の名前は、英国の教科書に今も記載されているという。

フィンランドでは「東郷ビール」が売り出されており、筆者もそれを味わったことがある。

これほど世界的評価の高い人物の名前が、日本の教科書では完全に無視されている。アンバランスというよりも異常である。

軍人はすべていむべき軍国主義者であるとするのなら、何と幼稚な頭なんだろう。

日露戦争においては、軍人はもとより、政治家も国民も武士道にのっとり、正々堂々と戦った。その具体例は枚挙にいとまがないほどである。当時世界中から日本が称賛されたのは、大国ロシアに勝ったからだけではなかった。その戦いぶりの立派さが評価されたからであった。しかるに

いま、日本人はそのことを完全に忘却している。

それについても思い出される話がある。

戦後間もない頃、占領軍の教育担当者たちは学校を訪問して、彼らの指示する新しい教育の実施状況を査察して廻っていた。

彼らの一行が某小学校を訪ねた。校長の案内で校内を廻った。倉庫を開けると、そこに乃木と東郷の肖像画があった。一瞬校長の顔がひきつった。

ところが次の瞬間、査察官の口から発せられた言葉は全く意外であった。

「乃木さん、東郷さんは偉大なる軍人でした。私は彼らを尊敬しています。」「日本の今日の不幸は、このような立派な軍人がいなかったからではないですか。彼らは軍人の鑑です。その肖像をかくす必要は全くありません」

校長はほっと安堵した。そして若い士官の卓見に深い感銘をおぼえた。

この話は四十年も昔のことである。そして今やつと「東郷さん」の名前が歴史の教科書に復活しようとしている。

まことに当然のことである。しかし、すなおでない者、思想的に偏向した人は、いっどこにでもいる。彼らはまた何かと屁理屈をつけて、これに反対しようとしている。

だが考えてみるがよい。これほど大きく歴史の歯車を廻

転させ、その功績を世界が認める人物をポイコットしてきた日本の歴史教科書は、いったい何であったのか。何故これほどの欠陥教科書がまかり通り、欠陥教育が放置されていたのか。

米軍の若い士官に教えられたにもかかわらず、日本人は四十年間敗戦ボケからさめなかつたのであろうか。我々に深刻な反省を求める声が、海の向こうから、空の彼方から響いてくるような気がしてならない。

今からでもまだ間に合う。後世の人々に笑われないような歴史書を、一刻も早く書き上げねばならない。歴史を見直すことは、己を見直すことでもある。

(教育正論第30号より転載)

※P・51上段末尾より続く。

「あなたはほんとうに日本軍人か？ それともドイツ軍人か？」と早口で西妻中尉に尋ねた。

だが、母ジャネットの母国語である英語がよくわかる彼は、毅然とした態度でいった。「おれは日本人、いや大日本帝国陸軍中尉西妻譲治である。」

大声の日本語で名のるや、まだ信じられないというような敵パイロットの視線を背中に受けつつ、父上見てください。自分は日本男児として立派に戦ってきました✓と心につぶやきながら、報告のために戦闘指揮所に向かった。

郷友連盟の理念

(昭和五十三年三月総会決定)

わが国の歴史と伝統を尊び、愛国心を高め、郷土の繁栄、日本の安全を図り、世界の平和に寄与する。このため

- 一 私たちは立派な日本人としての修養に
つとめよう。
- 一 私たちは天皇を中心として全国民の団
結を固めよう。
- 一 私たちは道徳を重んじ、公共に尽くし、
国民の義務を果たそう。
- 一 私たちは国や社会の秩序正しい進歩を
図ろう。
- 一 私たちは力を合わせて郷土を、日本を
守ろう。

眞の日本人(三)

——精神の国日本の真髄を

世界に伝えんとした内村鑑三——

大塚道廣

(大洲陶器^(株)社長
航少候⁽²³⁾期)

波乱万丈の生涯英雄西郷隆盛

西郷隆盛は文政十年(一八二七年)十二月七日、薩摩藩七十七万石の城下町、鹿兒島加治屋町に西郷吉兵衛の長男として生れる。鑑三より三十四年前に生れ、明治十年(一八七七年)鑑三より五十三年前、五十一歳にて城山の露と消える。

時代は英雄を生み、英雄は時代を創造するといわれる如く、幕末から明治初期にかけては日本の黎明期であり、明治維新の真只中であつたからでもある。

その銅像を見るに堂々たる体軀、特長のある太い眉毛、引き締つた口元、犬を連れて闊歩するあの悠然自若たる姿は清濁あわせ呑む抱擁力を持ち、自然的印象を与えずにはおかない。これ眞に英雄として、また偉大なる人物とし

て万人にひとしく敬仰される所以である。

のちの大御所山県有朋をして、西郷ひとたび立てば天下は土崩瓦解するであろうとおそれさせるにいたつたのも勿論、西郷の偉力ではあるがまた日本の大いなる転換期の所産でもあらう。

隆盛は現世においてもあまりにもよく知られた人物であるのでここではその要点のみに絞らせていただく。

二十八歳まで藩の小吏であつた西郷が、四十六歳にして首相兼陸軍元帥、近衛都督となり、五十一歳にして天下の賊として討伐され、悠々西南に散華するその一生は、眞に波乱万丈であり、悲運な英雄として惜しまれる所以である。

隆盛の逸話、伝記等はあまりにも多いのでここでは省略

するが、その遺訓に「万民の上に位する者、己れを慎み、品行を正しくし、驕奢を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民其の勤勞を気の毒に思ふ様ならでは政令は行われ難し。然るに草創の始に立ちながら家屋を文（かざ）り、美妾を抱へ蓄財を謀りなば維新の功業は遂げられ間敷也」と。

また「正道を踏み国を以て斃るるの精神無くば、外国交際は全かるべからず、彼の強大に畏縮し、円滑を主として、曲げて彼の意に順従する時は輕侮を招き、好親却つて破れ、終に彼の制を受けるに至らん」とある。

同郷の作家海音寺潮五郎は隆盛を評して、「天性正義好みで篤実で情の厚い性質」であり、また「今日の日本外交にピタリの人物で、時艱にして人を思う」の感慨が湧く」ともいつている。

西郷のえらさは純朴で私心なく名利にこだわらず、愛情が豊かであった点、純粹忠実に藩主に仕え、国家に尽くし、農民を愛し、そして友にも後進にも、父母妻子にも、豊かな愛情をささげたことなど真に生一本的な自然児的存在であったといえよう。

西郷陣没以来百十数年、その一統の奥津城（墓）に對する桜島は、今日も六千の荒御魂の如くに火を噴き続けている。

大君の為には何か惜しからむ
薩摩の瀬戸に身は沈むとも

前詞は西郷、後歌は月照であるが、この如く当時の明治天皇への忠節と愛國の精神は実に強烈なものがあつたが、また天皇の西郷への御信望も更に深く、それだけにいったん賊名を着た隆盛ではあつたが、その罪を許されて正三位を追贈されている。

文徳修身経世の名君上杉鷹山

上杉鷹山といえば、藩政中興の名君として史上に有名であり、日本伝記書の中でも、もつとも多い部類に属する。

鷹山は、宝暦元年（一七五一年）七月二十日、高鍋藩主秋月種美（日向国三万石）の二男として生まれる。鑑三より百十年も前に生れ、百八年も早く文政四年（一八二一年）七十一歳にて亡くなつてゐる。明治以後の日本の危急に際して忠孝道德や勤儉貯蓄などの必要から、その道德精神を鼓舞する代表的人物であり、国定修身教科書の主要人物となつたこともある。

即ち「儉約」「産業を興せ」「師をうやまへ」「孝行」「志を堅くせよ」などであり、儒教倫理に根ざしたすぐれた人格としての実践道であり、教訓である。

その通り発明に優れ、ことに孝心が深く、学問好きで清潔な人格とその才能はこの時代とともにはぐくまれたもの

で、尊徳の勤儉貯蓄や、藤樹の「大学」を学び優れた孝心の実践など、その道徳的精神において帰一するところはまことに多い。

鷹山の政治理念については「伝国之神」に明らかにされている通り「国家は先祖伝来のもの、人民は国家に属するもの、君主は国家、人民のために存在するものである」として、いわゆる専制君主となることへの戒めをのべたものである。

しかし政治理念としての啓蒙性は、江戸時代における特定の「名君」の思想ではない。それは本来の儒教道徳における封建的な君主政治であった。

「儉約の心得」の一節には「儉約は上に向つて用を省き、事を約（つづまやか）にすべし、下に臨て利を争ひ、法を煩はしくすべからず……上の用を省き、事を約にするときは力をも入れず」と、これを儉約の要諦としている。

また政治道徳についての書簡には「聖人の道は广大無辺なもので、人情に逆うものでもなく、後世の人が学び得られないような高妙な理論でもない」と説きその実践性を強調している。

さらに学問は、武士の本道であると教え、学問体得の基は「修身経世」と説く。

婦人の道についての教育は、まことに懇切でない、熱

心であり、道徳の実践家鷹山の「挑之嫩葉」「野辺の若草」「朝な夕な」などに、その実践要諦が示されており、藤樹の心にも似て人間鷹山の偉大さそのすばらしさが察せられる。

儉約の思想とその実践、質素な衣食住生活、敬老、寛容、情愛、心など優れた人格の持ち主であり実践家であったことも、名君としていつわりなき表裏が、その史歴により実証されるものである。

特に「名君」としてその仁政にふさわしい美俗は数多い。「日本経済叢書」の中の「経済要論」によれば、享保年間（一六二四～四三）以後の賢君子は大樹（将軍）吉宗公、肥後銀台侯（細川重賢）、羽州上杉鷹山公、信州松代真田侯（幸貫）、予州大洲加藤侯だけであるとし、「其他ハ今世間ニ唱ヘズ」とのべている。

その中でも予州大洲の加藤侯こそ近江聖人と謳われた中江藤樹が仕えた藩主であったとは、名君には名臣あり、また偉人、聖人を生むの例えの通りである。

我が郷土大洲五万石の藩主が当時の五名君に列し、さらに藤樹をも生んだ経緯を史実により初めて知り世の奇縁に驚く。

このようにして「学問ヲ好ミ、文徳ヲ以テ国家ノ衰弊ヲ改革」し名君として全国にその名が知られたのである。

異彩を放つ日蓮の生涯

あと主題の「尊徳」と「藤樹」を残して日蓮のみである。日蓮といえば一般世間によく知られており、また日蓮宗という宗教にもこだわる結果ともなるので私としてはあまり好ましくないが、しかし真に異彩を放つ偉大なる人物であるのでその怪傑僧としての日蓮の生涯を披歴したい。

日蓮は、承久四年（一二二二年）の春、安房国長狭郡（現在の千葉県安房町）小湊の漁夫の子として生れ、弘安五年（一二八二年）六十一歳で入滅した。一説によると、父は遠江の国の武士貫名重実の子重忠で、聖武天皇の後裔三國氏の出であり、母は清原氏であったが、父は何等かの理由で安房の国に流されて漁夫となったという。

鑑三、隆盛、鷹山の時代とは大きくかけ離れ、五百年も六百年も以前のことである。時代的には大きな隔りがあり、現代の人達との感覚のずれもまた更に大きい。

日蓮は、鎌倉諸宗祖の中でも最後の頃の人であり、その生涯には二回も流罪の刑を受け、また迫害の連続でもあった。

他の宗祖は、この頃の政府から流罪に処せられたのは「法然」と「親鸞」であるが、日蓮はこのような迫害を受けるのは法華経に説かれてある予言を身を以て経験することだと解釈し、自らを法華経の行者と呼ぶようになった。

他の諸宗祖が坐禅や念仏によって心を淘汰し、縁に随つて教えを説いたのに反して日蓮は、五字の題目を日本国中に弘めようとし、反対非難するものに対しても、折伏（しやくふく）と称してこれを激発し、憤らせることによつて正法の種子をその心に植え付けようという方法をとった。そのために烈しい憎悪（ぞうお）、迫害を受けたのである。

さらに日蓮の特異な点は予言者としての性格である。安徳天皇は寿永の乱で何故海中に沈んだか、また後鳥羽上皇等は承久の乱で何故北条氏のために流されたか、という疑問を抱き、その理由を経文によつて立証しようとした。

日蓮は、天皇、上皇がそのような悲運に堕ちたのは法華経を信じなかったからだとし、若し皇室や幕府が日蓮の言を聴かずに、依然として法華経を信じなければ、必ず内乱と外寇とが起ると国難必至の大予言を絶叫した。

その予言は偶然にも的中し、殊に外寇は蒙古の来襲という未曾有（みぞう）の国難として現れたのである。日蓮は自分の二大予言が的中すると、法華経の行者から進んで、釈尊の本化（ほんげ）の弟子上行（じょうぎょう）菩薩の再誕であると称するようになり、自信を益々強くした。

批判的に言えば、予言などは宗教の本質とは何の関係もない迷信に過ぎないが、現代から見れば、日蓮の真価は予言者としての面ではなく、全仏教思想を「題目」で統一し

た点にあると考えられる。

題目とは「妙法蓮華経」のことである。「戒体即身成仏義」「立正安国論」「四恩鈔」「教機時国鈔」「開目鈔」「法華宗内証仏法血脈」「観心本尊鈔」「撰時鈔」「報恩鈔」「本尊問答集」「諫曉八幡鈔」「三大秘法菓承事」等多数の有名な著書があるが、特に蒙古来襲時前後のものには、宗教をもって国難を救わんとした日蓮の、予言、警告、諫言が余すところなく網羅されその信念が明白に吐露されており感慨深いものがある。

仏門に帰依し、即身仏滅を説き、題目の思想を普教し、「戒体」実践に流罪、迫害を乗り越え、その信念の具現を「行」と結論した点、やはり日蓮の天分を以てしなければ成し得なかったところであると評されている。

以上の他、人間二宮尊徳と近江聖人中江藤樹については少々長文となるので別冊に譲ることとする。

真の日本人とは

近年倫理性の退廃欠如は、政界はもとよりあらゆる業界の腐敗と荒唐をもたらし、清浄化への道は遅々として進まず、誠に憂うべき汚染感染処を知らず蔓延の現世である。

鑑三の如く、日本の民族的自覚を覚醒せしめんとして心臓と生活と肉声で訴えた献身情熱の人は今いづくにあるであらうか。

千古の昔より培われてきた日本人の悠遠無窮の倫理性、そしてそのすばらしい人間としての血脈と純潔な心は今なぜ失われつつあるのであろうか。

今我欲を退け、大義名分を貫き、人間性を回復し、邪念常識を打開し、平穩円満にして幸福な世直しを指標とすべき万人自覚反省の時である。

一人でも多く真の日本人たるべき人材、即ち歴史を動かす人間の力を最も必要とする時代ではないだろうか。

明治の精神的覚醒期が現代に蘇り、新しい近代日本の夜明けを期待してやまない。

道徳復興には百年総進軍の秋である。(終り)

北方領土返還要求署名

一月九日 兵庫県支部 八六二名

右は一月十一日、千島歯舞諸島居住者連盟宛送済み。(事務局)

お断わり

柏木理事「サイレント・ミッション」は記事執筆のため本月は休載させていただきます。(編集部)



昭和聖帝との 永遠の御訣れに

齋藤

忠ちゅう

（国際政治・軍事評論家）
（日本を守る会代表委員）
連盟顧問

昭和の大御代は
既に還らない

久しく致命の病苦に堪え給うた陛下。国民の必死の祈願の甲斐もなく、遂に崩御遊ばさる。いま、永遠の御訣れの日を迎え、断腸の思いに堪えない。

昭和の大御代は、永遠に終った。再びは還らない。

今日まで、八十七年、大御稜威のもとに、比もなく仕合せの日々を楽しんできた。これを喜びと言うべきであろうか？ それとも、無上の悲しみと言うべきであろうか？

陛下の御生涯は、まことに、波乱万丈の歴史であった。

神武天皇、国を創めたもてより、二千六百四十九年。皇国のその悠久の歴史を通じて、陛下の御一代ほど、悲痛の限りの運命に堪え給うた御生涯が、在り得たか？

御即位後、わずかに数年。昭和六年には、早くも、満洲事変が突発している。

更に、また、翌る昭和七年には、上海事変。一方、国内においても、陛下の御心を深く悩まし奉った五・一五事件が突発しているのだ。

御心を悩まし奉った

五・一五事件、二・二六事件

当時の政党の腐敗、農村の疲弊、更に、またロンドン軍縮条約締結の結果としてのわが海軍力の低落を深く憂え憤った一部の海軍青年士官、陸軍将校生徒、および愛郷塾生らが、結束して起って、犬養毅首相を遂に殺害するに到った悲痛の限りの事件である。

これに深く関係した大川周明博士は、同じく東京帝国大学に学び、同じく姉崎正治博士に親しく教えを受けた同門の兄弟子であった。

故郷も、また、同じく北陸であった故に、彼とは、歳の離れた兄弟にも似た関係に在ったのである。

更に、四年後の昭和十一年には、その年の二月二十六日に突発した、いわゆる二・二六事件、この事件の中心人物、北一輝（本名輝次郎）は、また、血縁の者。

同じく、これに深く関係した熊本第五旅団長、斎藤瀏少将も、また浅からぬ関係に在った同志の先輩であつた。

それ故に、この流血の事件の背後の事情は詳らかに知ることが出来たが、重ね重ね大御心を悩まし奉つた罪は、まさに、万死に値する。

半世紀にわたる

流転の始まり

私自身も、また、この事件を機として、十四年にわたつて身に余る御厚遇を賜つた恩師市河三喜博士の御愛顧に背いて、東京帝国大学を去つた。なによりも、恩師に御迷惑を及ぼすことを、畏れたのである。教職に望みを絶つて、論壇の生活に身を転じた。主たる職場は、新聞であつたが、陛下の御弟君、高松宮殿下が総裁として主宰される外務省関係の国際文化振興会が東大の研究室内に設けた英文日本百科事彙編纂所の指揮を命ぜられたのも、その時代である。

秩父宮殿下には、かねてから、御懇の御教えを戴いて居た。だが、高松宮殿下に御眼通りが出来たのは、この時期

が始めであつた。

同時に、また「改造」「現代」「公論」、三つの評論誌にも、編集顧問として関係していた。だが、最も主要な業務は、西ヨーロッパの幾つかの新聞の要請によって、英文、独逸文の評論を執筆し続けることであつたのである。

大東亜の戦いの

前後

間もなく、正力松太郎社長、宮崎光雄主幹の御懇の御招きによつて、読売新聞に論説客員として連続的に筆を執るに至つたことも、祖国の当面する危急の事態を深く知る機縁になつたと言えるであらう。

その時代に俱に筆を執つた畏友、岩淵辰雄、安岡正篤、鹿子木員信、御手洗辰雄、——いづれも、今は、幽明境を異にする。朝日新聞の緒方竹虎、毎日新聞の城戸元亮、田中香苗、日本経済新聞の小汀利得、いづれも、再び相見するすべも無い。

日本が悲劇の大戦に追い込まれた裏面の真実の事情は、このようにして、新聞・放送の世界の内部に在つたが故に、仔細に知ることが出来た。外務省内部にも、深く相識る先輩、僚友は、数多く在つたのである。

学界・言論界の代表者を結集しての巨大な機構、大日本

言論報国会も、すでに発足していた。会長としてこれを統率されたのは、すでに永く師事して来た徳富蘇峰翁であった。私に与えられた職位は、専務理事、事務総局長兼総務局長。

きびしい戦時政府の統制下に在って、何ひとつ際立った事が出来るはずは無かったのだが、ただ、陛下の御心痛も、周辺諸国の動きも、戦局の進展も、まさに、手に取るように知ることが出来たのであった。

忘れ得ぬ皇軍の

諸星

そればかりではない。海軍省においても、かねてから、本省の外交委員会委員として、国際法・国際政治関係の御諮問にあずかって居た。

その委員会の同僚も、当時、東京帝国大学において国際政治史を講じつつあった神川彦松。また、合衆国憲法史の高木八尺。その他、田村幸策、三枝茂智の諸教授、いずれも、早く世を去られた。

だが、わが海軍との浅からぬ関係は、そのような評論執筆を業とする立場だけに因るものではない。海軍との関係は、幼少の折から、すでに深かったと思う。

加藤寛治、末次信正の両提督、いずれも、年少の折より

御教えを賜わった心の師父である。

まして、山本五十六大將は、同郷の先輩。最後の聯合艦隊司令長官、小沢治三郎提督にも、永別の日まで、親しく御洪誼を戴いた。

今は悉く幽明境を異

にする師父、同志

私自身、もとより、「戦前、戦中の地位」により、また、言論、報道の職責によって、戦後、最後まできびしい追放の処分を受けて居たのである。

いっさいの官職を追われ、学界に、また、論壇に復帰することも許されなかった。生きる途は、全く無かったと言えよう。

盟友、池崎忠孝は、巢鴨の獄中において憤死した。鹿子木員信も、また、獄中に病を得て、鎌倉の自宅に帰されて後、淋しく世を去った。

その中で、対日講和条約発効のその日まで、最後まで、賀屋興宣、岸信介の両氏と共に、三名だけは、遂に追放を解かれなかった。

その後、英字紙「ジャパン・タイムズ」の論説主幹として、論壇に復帰したことを、誰よりも御喜び戴いたのは、小沢提督であった。当時、内幸町の帝国ホテル裏隣に在っ

た社屋の私の執務室を御訪ね戴いた提督が、落涙して語られた恋闕の思いを、私は、終生忘れ得ないであろう。

だが、その小沢提督も、提督に私をお引き合わせ戴いた野元為輝少将も、つとに世を去られて居るのだ。

胸を搏つ痛恨

は、いま

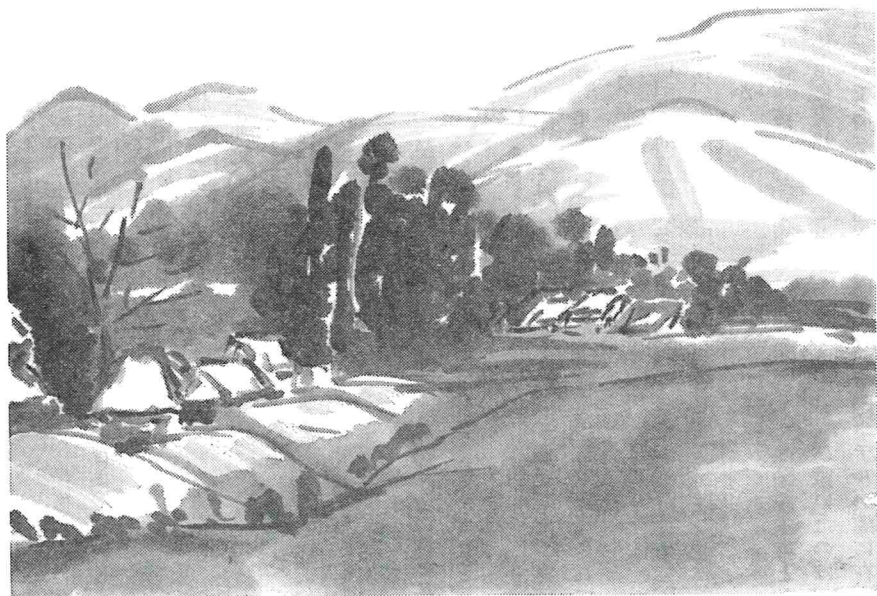
陸軍に就いても、厚い知遇を賜わった先人の想い出は、語り尽くせない。松井石根、本間雅晴、阿南惟幾の諸将軍。ただ、心深く御冥福を祈るだけである。

何よりも、悲しみに堪えぬのは、それら、今は亡き諸先輩の御教示を、なに一つ、実行し得なかつたことである。

わけても、今は世を去られた天皇陛下の御心を慰めまつる願いを、遂に何ひとつ果たし得ず、御訣れの日を迎えたことである。

そもそも、何のための八十八年の命であつたかとも思ふ。

戦後、陛下が最も大御心を悩ませたもうた悲運の限りの四十余年にしても、総理府公務員制度委員会委員として、文部省教科用図書検定審議会委員として、また、安全保障国民会議議長として、大御心を安め奉る決定を、なに一つとして果たし得たか？ 願て、ただ慚愧の思いに堪えない。



軍事常識

ステルス機

(見えない飛行機)

久松公郎

(連盟理事)

昨年一二月、米空軍は開発中のB-2型ステルス爆撃機を公開、間もなく初飛行が行われる旨発表した。また、その数日前にはステルス戦闘機F-117Aの外形図も公表され、軍用機はいよいよステルス時代を迎えつつあることを印象づけた。

両機とも、長く関係者の話題になりながら実体は堅く秘されてきたが、今回、ようやくそれぞれの特異な形状が明らかになって人々を驚かせた。即ち、B-2は突起の少ない全翼機、一方のF-117Aは多面体のデルタ機で、いずれも従来の飛行機の外貌とは著しく異なるものであった。ステルスが厚い秘密のベールに包まれていることは勿論であるが、その重要性に鑑み概貌を観察することとする。

ステルスとは

ステルスとは「ひそかに行動すること」の意味であるが、軍事的には敵に探知されにくいこと、即ちレーダーや赤外線等で発見されにくいことを指している。

従来、航空攻撃には敵のレーダー網を回避するため超低空進入が多く用いられてきたが、航続距離や目標捕捉上の問題があり、加えて敵の空中警戒機によってその利点が失われる傾向が生じていた。従って即ちステルス機の製作は関係者の永年の夢であったが、材料や構造面の進歩により近年ようやく実現することとなったものである。

なお、航空機のほか、艦艇や戦車などのステルス化研究も行われている。

ステルスの方法

ステルスには飛行機の形状、構造、材料の各面からの方法がある。

まず、敵のレーダー波の反射が拡散するよう、飛行機の形状に丸味をもたせることである。特に胴体と翼の付け根の部分とかエンジンの空気取り入れ口などは、強いレーダー反射を生じ易いので、滑らかな曲面にしなければならぬ。これをさらに徹底し、胴体やエンジン部位の突起を最小限にした全翼機は、ステルス機として望ましい形の一つであり、B-2ではこの形状が選ばれた。

一方、F-117Aのような多面体構造も、明らかに敵

の防空レーダー波を反らすことを狙ったものである。

材料面では、最近、著しい進歩を遂げている複合材は、金属よりも一般に電波反射率が低く、これを使用した機体はステルス性は高まる。また、電波吸収塗料や電波減衰構造等、位相差や反復反射を利用して電波エネルギーを熱に変換収束させる手段も益々進歩するであろう。

レーダー断面積とステルス

レーダー電波に対する飛行機の反射の度合いを示すのに、一般に「レーダー断面積」(RCS)が用いられる。ステルスの考慮が全くなされなかったB-52爆撃機のRCS一〇〇〇平方米であるのに対し、その後継機たるB-1-B爆撃機ではRCSが僅か一平方米になり、従ってレーダーによる被発見距離は約五分の一になるといふ。

米国の科学者によれば、RCSを一〇〇万分の一平方メートルとすることが可能との説がある。B-2のRCSがいかにどの数値かは知るよしもないが、それが実現すれば文字通り「見えない飛行機」が出現しよう。

赤外線その他とステルス

ステルスの能力としては、レーダーのほか赤外線による探知に対しても秘匿性が高い必要がある。

飛行機の最大の赤外線源は言うまでもなくエンジンであるが、B-2の場合、エンジンノズル両側の翼後縁が張り

出しているのは、排気口を隠して熱幅射を抑えるとともに、おそらく二次元ノズルを装備して排気温度を下げる効果があるものと考えられる。

光学的手段による探知に対しては、エンジンからのスモークを防ぐ一方、航跡雲を曳く高度を避けることは当然で、このほか、色調センサーにより翼面の色合いを背景の空に合わせて視認を困難にさせる方法などがあると言われている。エンジン騒音の低下等、音響探知対策等も当然考えられているものと思われる。

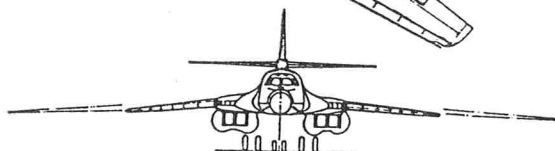
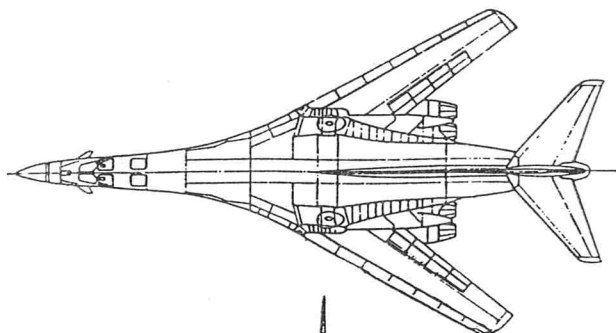
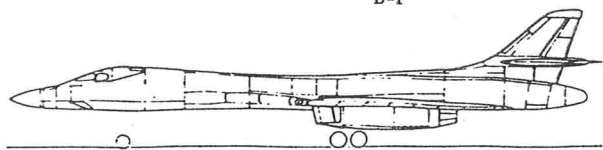
ステルス機の用法

これら各種のステルス性向上の結果は、敵の発見を困難にするだけでなく自機のECCM等防護手段の効果を大きくし、敵地進攻能力を飛躍的に強めることになろう。

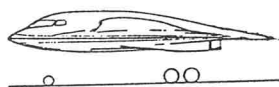
B-2は一三二機生産される計画と言われるが、一〇〇機生産のB-1-Bとともに戦略爆撃機として今後米国の核戦略の一翼を担うことになる。即ちB-2は亜音速ながら高空数千哩を隠密飛行し、ALCM(空中発射巡航ミサイル)をはじめとする攻撃威力は他の追従を許さぬものがある。

一方のF-117Aは既に五二機配備され、さらに七機生産される予定であるが、重要な戦術目標攻撃に効果を挙げることが予期される。

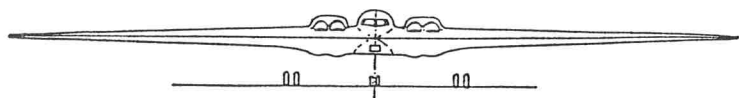
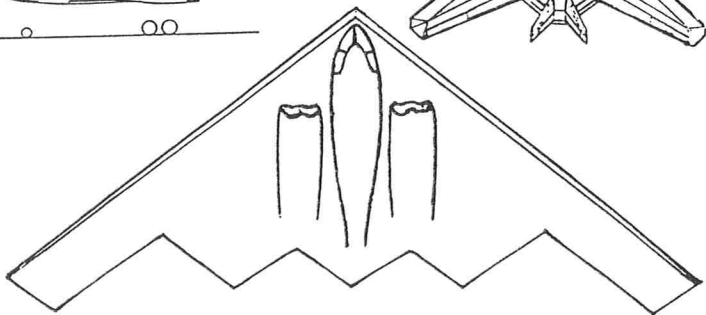
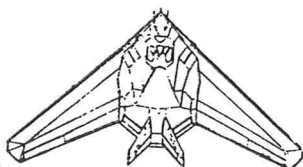
B-1



F-117



B-2



韓国親善訪問の記

63年度訪韓団長 中村守雄

(連盟顧問・元陸上幕僚長)

日本郷友連盟恒例の韓国訪問旅行は、今年もまた、矢部廣武常務理事の企画・調整・同行案内のもと、在韓日本大使館防衛駐在官の塚田信一・一陸佐や福山一行・一空佐らの協力を得て実施された。

在郷軍人会への表敬訪問、板門店休戦会談場や非武装地帯での南侵トンネルなどを含む最前線地区の視察、また朝鮮戦争の戦跡見学も兼ねた公州、扶余、慶州などの史跡めぐり等々の盛りだくさんのスケジュールも、連日絶好の晴天に恵まれて予定どおりに進められた。総勢二十一名(内女性三名)の参加者は、それぞれの収穫を得て、十月三十日無事日程を終了し帰国した。

紀行文は、毎年の参加者によって既に発表されているので、重複を避け、以下私の心に特に印象づけられた事項についてのみ記述し、ご参考に供したい。

一、陸軍士官学校にて

韓国陸軍士官学校は、ソウル市東北方郊外の自然林に囲まれた小高い丘陵上に、その堂々たる構えを見せている。

この地域の「花郎台」という呼称には心惹かれるものがある。花郎台を「ファランデ」と発音する、その響きも快いが、往古新羅の時代に、国王の親衛隊員となり、軍の中核となつて戦つた青年騎馬將校を呼ぶに「花郎」の名をもつてした。その言葉のもつ華やかさと雄々しさを、そのまま士官学校の所在地の名称として取り入れた韓国の人々のセンスにまず感嘆した。

校風である「智、仁、勇」を大書した扁額や、教育の最中に暴発しかかった手榴弾の上に身を伏せ、自己を犠牲にして生徒たちを守つた若き区隊長姜在求少佐の顕彰像も、訪れる人々に対し、花郎としてのあるべき姿を呼びかけているように思われた。

「花も実もある武人たれ」とは、まさに私共がその昔に士官学校に学んだ頃、将校生徒として訓育された徳目である。「武人」たることが認められず、「自衛隊幹部はただ紳士たれ」とのみ教えざるを得ない現代のわが国情を顧みて、「花郎」の名に示された東洋哲学的な軍人教育の場に

対して、久しぶりの感銘を覚えたのであった。

二、板門店にて

板門店での様子は、文字どおり「百聞は一見に如かず」であった。戦場体験のない私たちにとっては、生の野戦陣地を展望し、車窓から地雷原を真下に見下ろし、また真近に北朝鮮軍兵士を見ることなどは緊張の連続であって、自衛隊を退官して三年近くも経ち日々安穩の生活を送っていた身に、刺激と活力を与えてくれた。

最前方の国連軍施設内で歯切れのよいブリーフィングをしてくれた若い韓国軍兵士の階級が「一等兵」であったことも、新鮮な驚きであった。聴けば、国連軍管轄地区に勤務する韓国兵には選抜された優秀な者が充てられ、本人たちは除隊後、社会的に高い評価を受けるといふ。「国民皆兵」という国情に基づくものとはいえ、わが国では既に忘却されんとしている「国家防衛」の尊さ・偉大さを、この兵士一人の存在が示してくる思いであった。

ジーパンに運動靴姿では休戦会談場のある共同警備区域に入ることが許されず、また北朝鮮兵に手を振ったり笑顔を見せたりすることのないようにとの注意も与えられた。北鮮側に写真を撮られ、ジーパン姿は貧しさの象徴として、手を振ったり笑顔を見せたりすることは北朝鮮への好意の表れとして、それぞれ宣伝材料に悪用される恐れがあり、

これを懸念しての措置であるらしい。

第三トンネルの見学時にも、「坑道内の排水が北流しているのは、このトンネルが北朝鮮の手によって掘られた間違いない証拠であり、韓国側が掘ったという北の主張は全くのデマ宣伝である」という、言わずもがなの説明があった。そう言えば、士官学校長との対談の中にも、「北鮮の悪宣伝を信用しないで貰いたい」旨の言葉があったのが思い出される。

ラングーンでの韓国政府閣僚爆殺事件といい、大韓航空機墜落事件といい、既にわが国でも、北側の謀略によるものとして国民の認識はほとんど一致しているのに、韓国人たちは、日本人の考えが北鮮の宣伝によって曲げられる恐れありとして懸念しているようである。

国境を接して北朝鮮と対決し、その直接の脅威と悪宣伝を身近に受け続けている韓国と、自由圏の中にあつて平和に暮らしながら総てを客観視しているわが国との、立場の違いを痛感させられたのであった。

* * *

軍事境界線から僅か四十キロに過ぎない場所にある首都ソウルの様子は、全く平和そのものであった。オリンピックの成功によって自信を深めた韓国は、国民の勤勉さともあいまって、更に経済的な発展を続けて豊かさを増し、市

民の生活にも余裕が出てくるであろう。「衣食足りて礼節を知る」と言われるが、「貧にして民は国を思い、衣食足りて国を忘れる」こともまた人情の常である。

朝鮮動乱後既に三十五年、躍進を続ける隣邦韓国の現況に心強い印象を受ける一方で、「国富み、兵を忘れんとしている」わが国の轍を韓国が踏むことのないよう、切に祈りながら釜山空港を離れたのであった（六三・一一・三〇記）。

訪韓団事務局から

一、六十三年度訪韓団員の顔振れは、中村守雄・千鶴子夫妻のほか、次のとおりです（五十音順）。

乾 静雄、岡田正秋、織田 昭・美恵子夫妻、川野清成、木村健二郎、久米 充・晃父子、高橋文雄、高木惣治、田口明良、長谷川 博、穂積敏夫、三木秀雄、村田 敬一郎・寛夫妻、村松俊則、山根肇太郎、矢部廣武

二、また平成元年度の訪韓旅行は九月下旬頃に実施の予定であり、細部については後日、「郷友」誌上に発表します。振るってご参加下さい。なお今年度は、愛妓峰など前線地区の視察のほか、空軍士官学校や空軍の実戦部隊の見学などもスケジュールに含めるつもりです。





陸軍士官学校での栄与礼による歓迎



陸軍士官学校で揮毫を依頼される中村守雄団長

第十九回世界歴戦者同盟(WVF)総会に参加して

味岡 義一

(連盟理事)

昭和六十三年十二月七日から十一日にわたりフィリッピン、マニラ市において行われた第十九回世界歴戦者同盟(WVF)総会に日本郷友連盟を代表して参加したので以下その概要を報告するが、先づ大東亜戦争のフィリッピン地域で戦死された英霊に対し深く哀悼の意を表する。世界在郷軍人の友好のためにWVFは一九五十年十一月、パリにおいて創設され、今や三十八年の歴史を経過し、加盟国五十四ヶ国、会員二十万人の世界的団体となり、国際連合の経済、社会委員会の第一級諮問機関として国際的にきわめて高い地位を保持している。日本としては昭和三十四年四月、日本郷友連盟が加盟し、日本を代表する唯一の団体となっている。

今回はアジア地域として初めてフィリッピンが主催する総会であり、アキノ大統領以下、フィリッピン在郷軍人会は勿論、軍官民をあげてこの会議の組織、運営に当り、大きな成功を収めた。

本総会には欧州、米国、アフリカ、アジア及び太平洋地域から四十一ヶ国の代表の約百七十名が集まり、かの太平洋戦争の中心的表徴となったマニラホテル(マッカーサー総司令官の居住したホテルである)で会議が行われた。十二月七日、先づ独立の英雄、リサールの記念碑に一同花輪を捧げて拝礼した後(写真その一)、アキノ大統領代理のラモス国防大臣以下各閣僚、国会議員の臨席の下、厳肅、盛大に開会式が行われた(写真その二、祝辞を述べるラモス国防大臣)。なお、本総会には味岡理事の他、総理府恩給局より、生田比呂美、及び大場敬三の調査官が参加され、終始熱心に会議に出席し、各国代表より恩給、年金制度の情報を収集されていた。

総会は開会式に引き続き次のような日程で行われた。

七日 午前 開会式及びWVF信条宣誓

午後 人權、軍縮、平和に関する講演(国連本部)

八日 午前 事務総長及び財務報告

午後 リハビリテーション病院施設の見学

九日 午前及び午後 分科会

十日 午前 分科会

午後 地域別委員会

十一日 午前 全体会議

午後 閉会式

以下、主要な議題及び所見を述べる。

一、新しくソ連在郷軍人会の加盟

今までソ連はWVFの会議に対し、屢々オブザーバーを派遣してきたが、今次総会において入会を申請し、代表団を派遣してきた。WVF理事会としては慎重に検討しソ連の入会を認めた。これは最近のゴルバチョフ外交攻勢の環と認められ、今後、欧州委員会及びアジア、太平洋委員会に出席することになった。その後、十二月二十日にはシユワルナゼソ連外相のフリーッピン訪問が行われ、ソ連のフリーッピン及び太平洋地域への進出が注目されている。

一、主要な決議案

各国代表団は夫々決議案を提出し、分科会で討議したがその主なものは次のとおりである。

- 核実験の禁止、特に南太平洋地域
- 化学兵器の禁止
- 麻薬の禁止への協力

○ 在郷軍人及び遺家族の老令化に伴う援助の強化

○ テロリズム禁止への連帯

○ 新しい武力紛争に伴う在郷軍人及び遺家族への援助

一、会長以下役員を選挙

閉会式に先立ち、会長以下役員を選挙が行われた。選挙の結果、会長ランシヨット（オランダ）、事務総長ウールガフト（フランス）、財務担当理事バジニ（イタリー）、理事会議長デイクソン（英）が留任となり、副会長には、米、西独、エジプト、マレーシア代表が選ばれた。特に今までオーストラリア代表がアジア、太平洋地域の副会長を勤めてきたが、今総会でアセアン諸国の推すマレーシアが副会長となり、新しい時代の到来を示した。

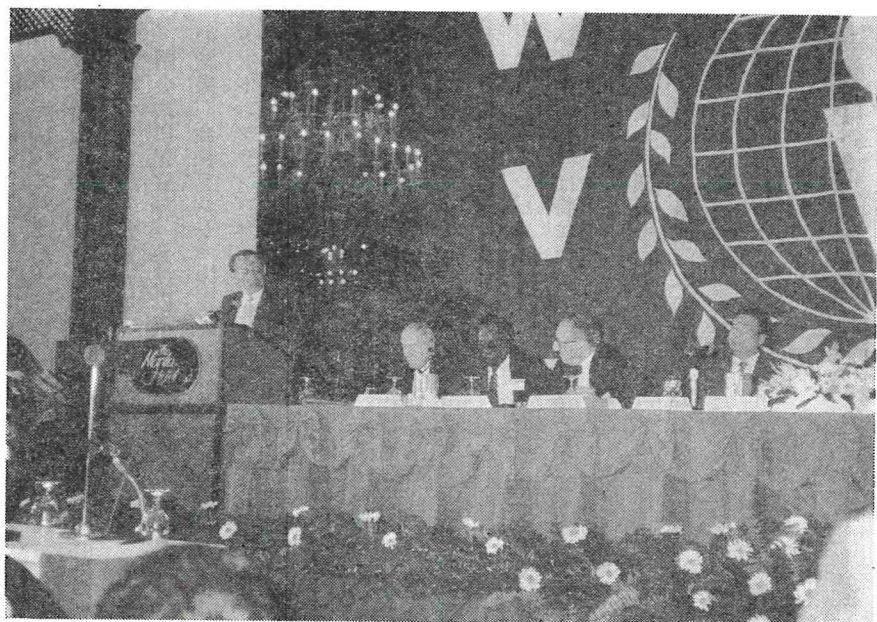
一、日本の役割

私はフリーッピン在郷軍人会長オカンボ氏と親しくしているが、今回は特にマニラ市内にある第二次大戦で戦死した米軍人及びフリーッピン軍人の墓地に案内して頂き、連盟を代表して深い弔意を表明した。オカンボ会長は私の手を強く握り、日米比三軍の戦死者の霊を共に弔い、将来の友好と平和を誓いましょうと述べた。ちなみに、オカンボ会長はレイテ島のゲリラ隊長であり、彼は日本軍の銃弾に

※以下P・39末尾に続く。



(リサール記念碑に拝礼)



(ラモス国防大臣の祝辞)

反自衛隊教科書の効果

小堀桂一郎
(東京大学教授)

七月二十三日に潜水艦「なだしお」と釣船「第一富士丸」との衝突事故が起つて以来、産経新聞と世界日報を除く各大新聞が一斉に海上自衛隊を非難攻撃する論調の紙面作りに精を出した。たぶんその様な空気が作り出され、又しても自衛隊いぢめの暴言妄説が横行することになるのではないかと心配していたところ、まさに恐れていた通りの雲行きになった。朝日新聞や毎日新聞が、元來社の姿勢からして反自衛隊的であり、常に何か自衛隊の落度をねらつては攻撃的論陣を張る体質の言論機関であることは天下周知の事実である。

従つてこれらの新聞の悪意に満ちた社説などに又事新しく腹を立てるほどの根気は当方にはないのだが、今回殊に悪質だと思ふのは彼等が読者の投書欄を十分以上に活用して執拗な海上自衛隊攻撃を続ける狡猾さである。読者の方も又悪質で、どの様な論旨と口調とを以て作文をすれば、自分の投書が購読紙に採用されるかを悉皆心得ている。そしてその様な新聞社の姿勢に巧みに迎合する。その結果、自分は安全地帯に居ながら苦境に立つ人

を誹謗中傷し、且つ自分の名が正義の士(?)として世に売れるのを確認するという、二重の卑陋なる楽しみを味わうことになる。

ところでこの様な心性さもしき新聞読者を育成した責任は奈辺にあるか。もちろん新聞社の姿勢自体に直接の責任があることは明白である。しかし凡そ事が自衛隊いぢめに関する限り、これらの投書者はその論調の初歩をば、既に義務教育段階の社会科教科書を通じて教えこまれていたのだと見てよい。自衛隊に対しては、どんなに悪口雑言をつらねようとも、どこからお咎めがくるおそれはなく、自分は一ぱしの正義漢面をしていることが許される。現行の社会科教科書に於ける防衛・国家安全保障の問題の扱い方を見れば、あの一群の悍しい投書家連を育てたのは、他ならぬ今日の学校教育であるという連関がよくわかる。国民の平和と安全の基盤を脅かすものは第一に偏向教科書なりと知るべきである。

(教育正論第30号より転載)

現代に見る間接侵略・革命(十一)

狩野 信行

(日本軍事史学会監事)

第八号から、東欧唯一の非共産国・ギリシヤにおいて展開されました、国際共産勢力の間接侵略と、それに励まされ又支援された国内共産勢力の武力革命行動と、そしてそれらに対するギリシヤ政府側の反撃等について記述して参りました。今回は、漸くにしてその共産化を跳ねのけることが出来た最後の国内戦について、簡単に申し上げた後に、次なる場面「ポルトガル革命」に筆を進めさせて頂くことと致します。

(カ) ギリシヤにおける一九四九年の作戦(つづき)

ゲリラ側は、兵約七千五百をもつて、ビトシ山に陣地を構築、地雷を敷設し、機関銃・追撃砲・大砲をもつて火網を構成し、丸太を使って比較的堅固な掩壕を構築し、かつ大量の弾薬を集積していた。政府軍は、陽動の為、約五十軒西南方のグラモス山陣地に対して、砲爆撃並びに地上部隊による大規模の限定的な攻撃を加えたのち、八月十日午後十時、ビトシ山陣地に対して、先ず第三コマンド師団を

もつて、攻撃を開始した。政府軍は、次いで四コ師団と一コ独立連隊とをもつて包囲攻撃し、三日間で占領、ビトシ山から脱出したゲリラの一部はグラモスに逃げこんだ。グラモス陣地には、ゲリラ五千がいた。政府軍は、八月二十四日午後九時、約六コ師団をもつて包囲するように、二方向から攻撃を開始し、三十日迄には全グラモス地帯を占領した。

ゲリラは、その主力が撃破され、数千のゲリラがアルバニヤに逃走した。斯くしてギリシヤ国土内には、飢えと疲れで打ちひしがれた少数のゲリラが、山岳地帯に細々と生存しているに過ぎないような状況になった。四九年秋、自由ギリシヤ放送は、アルバニヤの地から「ギリシヤを破壊から救う為に戦闘行為を停止する」と放送し、ギリシヤ国内におけるゲリラ・対ゲリラ戦は、ここで一応の終止符が打たれる事となった。四九年十月イギリスは、ギリシヤ駐とんの三千の兵力の撤退を発表した。このようにして、地

中海に面する戦略上の要点に位置し、良好な不凍港を持つギリシヤにおける共産国家の成立は、失敗に帰したのである。これを要するに、聖域の一角ユーゴの脱落と、トルーマン・ドクトリンに基づく米(英)の各種の援助、そして名将パンドス元帥らギリシヤ人自身の活躍が、漸くにしてギリシヤの共産化を救ったのであった。

(三) ポルトガル革命

さて、これ迄「現代に見る間接侵略・革命」と題して、欧州のチェコ・スロバキヤとギリシヤについて述べて参りました。只今からは欧州西端のポルトガルについて申し上げて見ようと思います。なお、ポルトガルが終了致しましたならば、編集部のお許しを得て、一気に大西洋を越え、ラテン・アメリカにおける「現代の間接侵略・革命」について述べさせて頂こうかと考えております。

ところで一九四八年に、遺憾ながら完結して了ったところのチェコ革命は、第二次大戦終結に伴う国内混乱と、軍警その他国家統治機構の掌握のもとに、行われた所謂「平和(的謀略)革命」であり、一九四七年初めから国内でゲリラ戦が戦われ、四九年末に辛うじて自由陣営に踏み留まることの出来たギリシヤのそれは、言わば国際共産勢力の間接侵略を防ぎ、そして戦い抜いた「ギリシヤ内戦」でありました。この二つはかなりその具体的な内容・様相

が異なっておりました。これから申し上げるところの「ポルトガル革命」も亦、その内容においてその様相において大いに右の二つと異なっておりますが、これからの日本の平和と安全を考える場合におきましては、やはり貴重な教訓の数々を持っているように思われます。なお、皆様ご存知のように、このポルトガル革命なるものが展開されました時期は、一九七四年春からの約二年(見ようによつては現時点迄)でありまして、比較的に新しいものであります。

ポルトガル革命の地理的・時間的問題

欧州の西端ポルトガルの革命は、一九六四年から戦いが本格化し、そして七三年には主力軍たる米軍の完全撤退となったベトナム戦争・革命に大いに影響され、又七〇年秋から七三年秋にかけて行われた南米チリの革命に甚だしく影響されたと言われております。現代に見る間接侵略・革命の一つの特色であります。このことはラジオ・TV又衛星中継利用等々通信手段やマスコミの発達とともに、益々顕著になりつつあります。

又ポルトガルの地理的状况は、南米チリのそれに少々似ておりまして、隣国と言えるものはスペイン一国のみで、その向こうは仏あり、ベネルルクス三国あり、西独あり、又東欧諸国ありで、世界赤化の元兇(?)ソ連とは相当疎

遠の位置にあります。南米チリも、隣りは色々問題を抱えているものの、皆自由圏の国々ばかりであり、漸くにして共産化しつつあったキューバと離隔し、そして更に肝心のソ連とは甚だしく離れておりましたので、より完全なる赤色化の為に諸事困難が伴ったものでありました。この点、ソ連の隣りに位置するチエコ・スロバキヤは完全に赤化され、当時赤化不完全の東欧諸国を介してソ連に対していたギリシヤは、同胞相打つ激越なる武力戦をも展開したものの、遂にその毒牙から脱することが出来たことは、意味また極めて深いものがあります。

ところで肝心の我が日本は如何でありましょうか。狭い海を介しているとは言え、千島・樺太・沿海州等ソ連そのものと直接対峙し、又お隣りの韓国を隔てて過激な共産国北鮮と近く、又沖繩・南西諸島のお隣りにこれ又海を介してはいるものの巨大な赤色中国と接しております。申す迄もないことですが、私共は余程注意しなければならぬ事が、この「現代に見る間接侵略・革命」からも良く分かる訳であります。

ポルトガル革命の概要

このポルトガル革命は、南米チリの所謂「革命と反革命」を反面教師としながら展開されたことでもあり、又欧州西端の戦略的に重要な国における革命であつただけに、

内実は危機一発の場面が再三登場したものの、皆何とか収束させられました。そこで表面的には、穏やかなる変革であるとして、「革命」なる用語は返上してもよいのでは無いかとさえ言われておりまして、やや難解です。以下、先ず概要を申し上げておく事と致します。

一九七四年四月二十五日早朝、軍部によるクーデターが突如として敢行され、所謂「カエターノ独裁体制」が無血の中に崩壊させられます。中心人物スピノラ將軍が、やがて大統領となり、「中道右派」「中道左派」「左派」「極左」に分類し得るところの將校連中による内閣が誕生致します。言わば一九一七年のロシア革命時の最初の内閣、即ちケレンスキー内閣に相当します。ロシア革命では、その次の第二段革命によってレーニン率いるボルシェビキが政権を掌握し、そこで共産化が略々確実となった訳ですが、ここポルトガルではそのような訳には参りませんでした。スピノラ大統領は、言わば「中道右派」でありまして、自由を拡充しつつ従来の伝統をも残そうとして、左派將校らの排除を図ります。しかしこれは結局失敗して、南米ブラジルに亡命するに到ります。ここで先ず「中道右派」が消えてしまいました。首相ゴンサルベス陸軍大佐は、士官学校出身ではありますが、秘密共産黨員であつたとも言われ、この分類では「左派」に当たります。この左派軍人達

をポルトガル共産党が、終始全面的に支援致します。これに対して、元軍人であるゴメス次期大統領、アゼベド次期首相、アンツネス少佐らの「中道左派」を、ポルトガル社会党が概ね終始支援致します。「極左」に相当するカルバリヨ陸軍少佐ら強硬派は、多くの極左グループと、多くの過激な下士官・兵達によって支援されました。

この「中道左派」「左派」「極左」の三者が、三つ巴となつて国軍内で争い、これに社・共・極左の諸政党並びにそれぞれの思想・迷惑を有する国民多数が、かかわり合つて色々な状況が展開されたのが、ポルトガル革命の二年間でありました。この二年の間には、ベトナム共産化の完成即ち七五年春のベトナム戦争終結や、E.C.米国等との経済上の問題、西欧諸政党のポルトガル諸政党とのかかわり合のいの問題等々があり、結局は、ポルトガル国民一般も平静を取り戻して、現実路線を取るポルトガル社会党が国民多数の支持を得、又多くの軍人達の支持をも得て、政権を掌握するに到つたものであります。

ア サラザール、カエターノ時代

(ア) サラザール

サラザールは、一八八九年四月二十九日、リスボン北方約二百軒のコインブラ市に近い農村で、大地主の土地管理人の息子として生まれた。ヒットラーと同年である。地元

の修道学校から、やや遅れて(貧しさの故に)コインブラ大学法学部に入り、一九一四年二十五歳で卒業した。その後父の雇い主の娘に求婚したが敗れ、その為か否かは不明なもの、彼は生涯独身を貫く。

一九一七年助教、二十一年国会議員、二十六年コインブラ大学教授でもあった彼は時の政府に請われて蔵相となつた。これは僅か五日間で辞職したが、二十八年四月再び請われ、条件付きで蔵相となる。財政上の全権を要求し、これが認められたからである。当時のポルトガルは、財政的に破綻を来し、政府は殆ど政府らしい仕事が出来ないような状態であつた。彼の要求は、「各省は、蔵相の決める支出予算を越えぬよう事務を縮小調整すること」「各省は、国家の収支に直接影響する何らかの措置をとらうとする時、予め蔵相と協議して同意を得ること」等々いわば行政改革を強行するようなものであつた。

(つづく)





郷土の城 (20)

現存最古の天守

越前 丸岡城

佐々木 信四郎

(城郭学者)

昭和天皇の崩御に際し、謹んで哀悼の意を表します。

一、越前の地

日本海に面する越前の地も、戦国時代には越前一向一揆が加賀の一向一揆とともに在地領主(その地方の国人領主)に手向い、武士と宗徒・農民がいり乱れて互に激しく戦っていた、

また、この地方は越後・越中などより京に上る要路でもあった。

福井市の東北にある静かな町丸岡に、現存最古といわれる丸岡城天守が聳えている。

この小さな古式の天守が、いま町おこしに一役買って、再び天下に名を挙げようとしている。

天正元年(一五七三)織田信長は近江小谷城主浅井長政・越前一乗谷城主朝倉義景を滅ぼし、余勢をかって天正三

年越前の一向一揆を平定するため、大軍をもって一揆の本拠豊原寺(坂井郡丸岡町豊原)を攻略し、このとき数多くの寺坊も焼払ってしまった。

そして、信長はこの地の抑えと、越後上杉家の牽制に、随一の家臣である柴田勝家に越前を与えて入封させ、北庄(福井市)に築城することを命じた。

勝家は北庄を居城として、養子で甥に当る柴田伊賀守勝豊を豊原に入れた。

勝豊は翌天正四年、豊原から丸岡(坂井郡丸岡町霞)に移り、丘陵に築城の工を起した。

二、丸岡築城

城は独立丘の頂上に本丸を築いた平山城で、石垣をめぐらした本丸の西南に天守を造営した。

東に東の丸、北に二の丸を設け、城域に幅の広い五角形の水濠をめぐらしたものであった。

天守台は高さ約六呎ほどの自然石の野面積で、天守一階土台は天守台天端より内側にあり、裾に庇ひましをめぐらして雨水の浸入対策をしている。

これは建物を石垣陵線より内側に引込ませた築城技術の古い形である。

天守は入母屋大屋根檜上に、望楼を乗せた形で、最上階に廻縁高欄をめぐらし、外部は木地が多く、典型的な初期の形式である。

初層は大壁に下見板張り、二層目は小壁で、一・二層目の間に内部階があり、切妻破風をかけている。

この切妻破風は、望楼部の補強と、四方正面の形をあらわし、外部突上板戸、内部引戸の連子窓である。

通し柱は二・三階隅柱のみで、梁で上階の柱を支え、母屋柱は堀立柱である。

屋根瓦は福井特産の笏谷石（凝灰岩）を用いている珍しいものである。

この天守の創建年代に疑問もあるが、勝豊築城の天正四年頃と推定され、犬山城の移築説が否定されたいま、現存最古の天守と考えて差支えない。

昭和九年国宝に指定されたが、昭和二十三年六月二十八日に、この地方を襲った福井大地震で倒壊し、戦後の復興も未だままならぬ時期ではあったが、残材を保管し、昭和

二十六年より復旧工事にとりかかり、初層の柱材などは比較的使用可能なものもあり、上層部材や瓦はほとんど新たに昭和三十年に完成した。

三、丸岡城の変遷

天正十一年、柴田勝家は賤ヶ岳の合戦で秀吉に敗れ、北庄で自刃して柴田家も滅びると、この城には青山修理亮が入城した。

そして、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦に青山氏は西軍について敗れ、徳川家康が天下の実権を握ると、越前には結城秀康が入部して、その臣今村盛次がこの丸岡に居城し、続いて本多成重が四万三千石で入封した。

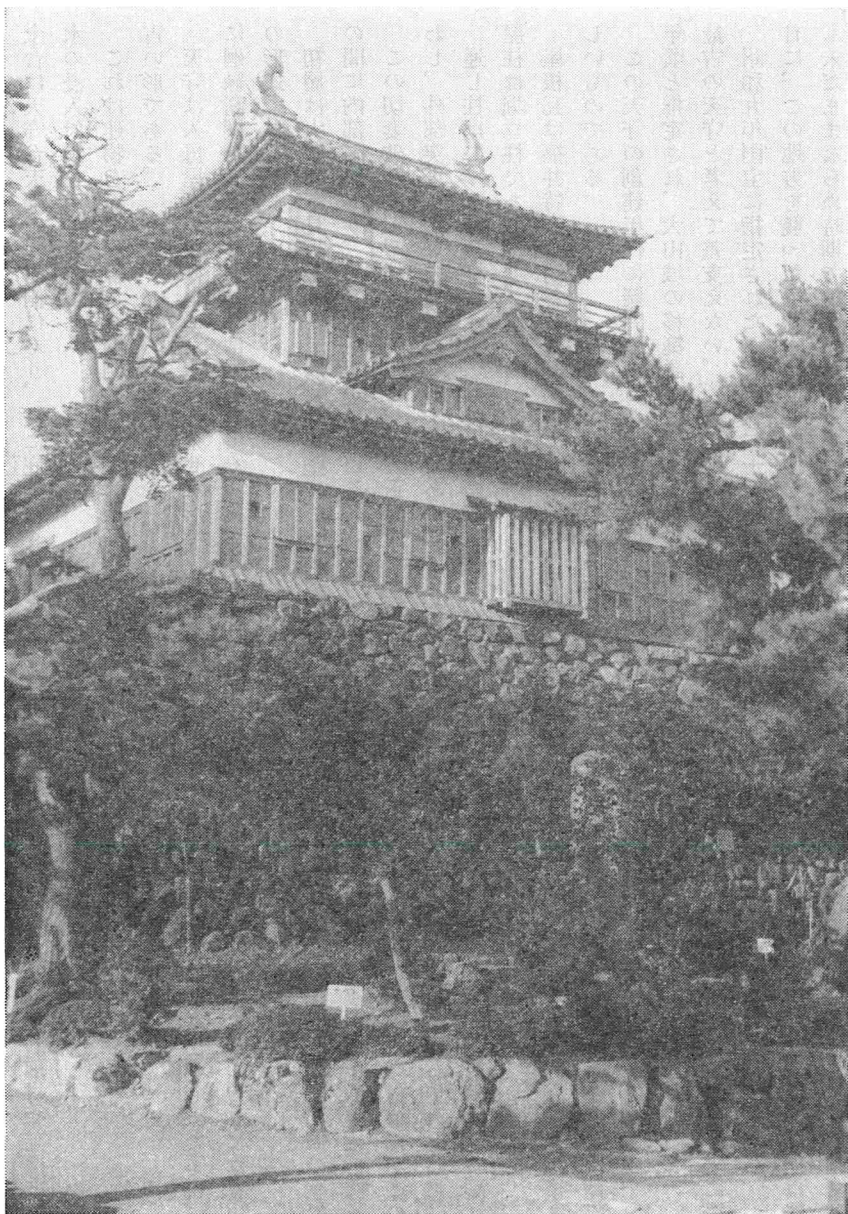
本多家四代目の重益のとき、城主は酒色に溺れ、お家騒動が起り改易されてしまった。

その後をうけて、元禄八年（一六九五）越後糸魚川より有馬清純が五万石で入封し、八代続いて明治維新を迎えた。

四、現在の丸岡城

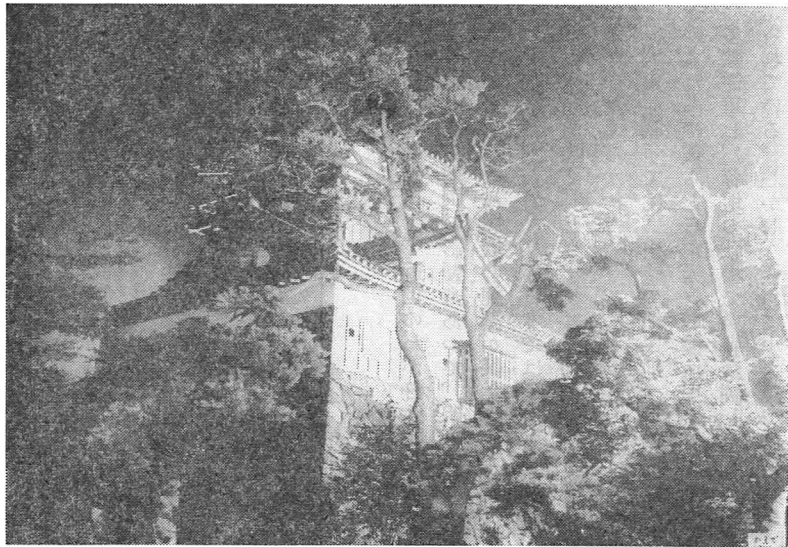
明治に入って城は一時官有となったが、後に民間に払い下げられ、天守以外は全て建物は破却された。

ただ本丸東裏門に通ずる処にあった不明門は民間の邸宅に移築され現存している。



天守（国指定重要文化財）

この天守は小形で、地味な姿だが、現存最古の天守として、初期形式の古風な形態をよくとどめている。



天守夜景

戦陣の篝火に浮び上った姿であろうか。

その後天守は丸岡町に所有者より寄贈され、現在は国指定重要文化財となっている。

城地は整備され、公園として一般に開放されている。

丸岡町では天守を重文指定より国宝指定に格上げするよう中央に働きかけ、この静かな町の発展にも努力している。

※P・29下段末尾より続く。

日本は今や国際連合に加盟し、西側の一員としてかつ世界の経済大国として政治的、外交的、経済的、科学技術的更に安全保障分野においても大きな役割を期待されている。この会議を通じて、知り合い、語り会ったフィリピン在郷軍人、政治家、軍人、民間人等から一言も第二次大戦で受けた被害についての怨みを聞いていない。私が戦争について遺憾の意を表したすべての場合、彼等はそれは過去のことであり、我々は現在及び将来において友好と平和を保つべきでアジアの友として協力しようとした。

郷友連盟は有末名誉顧問の先見の明によりWVFに早く加盟し、世界各国在郷軍人の信頼と広い国際交流の場を確保している。今後、連盟は、自衛隊、隊友会と共に現役軍人、在郷軍人及び民間人との国際的及び二国間の交流を広め、わが国の安全保障と世界の平和に寄与しなければならない。

小説

碧眼の侍

高橋文雄

(連盟参与)

はじめに

大昔はいざ知らず、近世のわが日本では徳川時代三百年間に及ぶ鎖国の影響もあって、明治維新による開国の後もおおむね民族の純潔が保たれてきた。したがって欧米諸国と異なり、日本では混血児を奇異の目で見るとが少なくなかった。

大東亜戦争では、当時の植民地であった朝鮮・台湾の人たちや彼らと日本人との混血児が日本軍人として多数従軍し、各地の戦場で勇戦奮闘したことがよく知られている。しかし、極めて少人数ではあるが、西洋人との混血児である帝国軍人も存在した。

「鬼畜米英」のスローガンのもと、青い目の混血児に對して国民が敵対心と憎悪感をあらわにしていた戦時中の日本国内にあって、彼らはさぞかし肩身の狭い思いをしながら毎日を過ごしていたことであろう。

そのような中で、日本人の父親と西洋人の母親との間に生まれた混血の日本軍将校、それも陸軍のパイロットたちが三人もいたことを知る人は、あまり多くはないだろう。

ここに掲載する「碧眼の侍」は、彼らを偶然にも個人的によく知っている高橋文雄氏（陸上自衛隊OB・連盟参与）が、三人をモデルとして小説風に書き上げたものである。

さて、その三人とは、(1)父親が日米開戦直前の駐米

大使、母親が米国人である来栖 良陸軍大尉。戦争末期の本土防空戦で、B-29迎撃のため福生飛行場から離陸し、見事敵機を撃墜したが自らも被弾し惜しくも戦死した。(2)母親が英国人で、戦時中は宇都宮の陸軍飛行学校古河分校の操縦教官を勤め、戦後日本航空の運航業務室に勤務した西 郡氏。(3)父が陸軍中将、母がフランス人で、戦時中は戦闘機乗りで陸軍大尉であった新妻東一氏。戦後は航空自衛隊に入隊し、ジェット戦闘機の操縦教官や、国産ジェット練習機T-1のテスト・パイロットも勤め、一等空佐で定年退官した。現在では、日本唯一の民間アクロバット・チームであるピッツ・アクロバティックス倶楽部の専任パイロットとして活躍中の名物男。

軽い読物として、ご一読願いたい。

連盟理事 矢部廣武

(一)

西妻譲治。父はわが国有数の外交官、母は米国の上流家庭に育った金髪の美人、彼は美貌の母の血を受け継いで、長身で碧い目の美青年である。戦前の学生時代、彼は近所の女学生のあこがれの的であった。彼は、家庭ではしばしば英語を使い洋食を食べることも多かったが、よそに行っ

たり仲間の中にはいけばタイロン・パワーばりの外貌とは裏腹に、ペランメエ口調に輝(ふんどし)をこよなく愛する江戸っ子であった。

その当時多くの青少年の夢であった軍人志望の気持も人一倍で、スポーツマンの彼は特にパイロットになることを熱望し、東京帝国大学(現東大)に進学して外交官になるようにと勧めた父親を落胆させるばかりであった。

だが、いくら著名な外交官を父に持った彼でも、白人との混血であり白い皮膚をしている以上、陸軍士官学校や海軍兵学校に入学して現役軍人になることは不可能で、必然的に予備役将校への道を選ばざるを得なかった。それが、単一民族で成り立つこの国のしきたりでもあった。従って、彼が日本軍人、いや陸軍のパイロットとしてたどる道は、陸軍の技術将校から操縦士官に転官するか、逓信省の航空機乗員養成所に入るかの二つの道しかなかった。

さる大学の理工科に進んだ西妻は、結局陸軍の技術将校から操縦士官になる道を選んだ。

熊谷の陸軍飛行学校に見習士官として入隊した彼は、学生時代にラグビー部の名スリークォーターとして鳴らしただけに、操縦技量は同期生の間では抜群であり、冒険好きなヤンキー気質の血を引いた彼は、単独飛行を終えて特殊飛行のアクロバット課目に進むや、鬼より怖い教官の目を

かすめては超低空飛行で河面の上をすっ飛ばし、釣人たちを啞然とさせたうえ、更に鉄橋の下を潜り抜けたりするなどのアドベンチャー振りを発揮した。また課業外の内務班では、金髪のがぐり頭に禪一つの裸でベッドの上に大あぐらをかき、「碧眼の若武者」として同期生たちからも結構親しまれていた。

しかし、見習士官の軍服を着て、父から受け継いだ伝家の宝力を腰に提げた彼の心には、多くの上司や同期生たちから信頼されているというものの、心情的に少なからず拘泥するものがあつた。

それにもかかわらず、たまの休日に帰省するときに列車内や街で行き交う人々のまなざしには、近ごろ巷間に流行りだした「鬼畜米英撃滅」のスローガンに肩身の狭い思いをしていた彼にとって、意外なほど変化が見られなかった。彼に接する者の態度は、軍人に対する尊敬と信頼そのものであり、むしろそれ以上の何かを感じとれるくらいであつた。

碧い目の日本帝国軍人に対し、黒いひとみのわが同胞は、当然のことながら侮蔑的な言葉を浴びせるものと彼は覚悟し、日ごろからその心構えもじゅうぶんにできていた。

だが、彼の予期していたことは全く杞憂であつた。そこで彼は、自らの心にひっかかるわだかまりを、自ら打ち消す必要があつた。

（日本人は、内心白人にコンプレックスを抱いているのではなかるうか？ 皮膚の色などは気にすることはないではないか。おれはれっきとした日本人だ。……待てよ。それにしても俺は、他の同期生より若干メツチェン（女の子）にもてるわい！）

あれこれと手前勝手な想像をしてみても、つまりは「合いの子」に対する日本人の不可解な接遇を自ら説明せねばなるまいと思つた。

しよせん、わが大和民族は古来より、「白い皮膚の色」を美男・美女の第一要素としているようである。古いことわざに「色の白いは七難を隠す」とあるように、明治、大正の文豪も白い皮膚をほめたたえた作品を多く残している。

谷崎潤一郎も「痴人の愛」の中で日本婦人とロシア婦人の色を比較し、黄色い肌に対しロシア婦人の白い皮膚を大理石にたとえて礼讃している。また昭和初期の日本男性にとって、東西人氣女優の第一位はグレタ・ガルボであつたし、歌舞伎の俳優が眩しいほどお白粉を厚く塗っているのも、白色に対する本能的な憧憬があるのかもしれないと西

妻讓治は考えた。

(二)

大東亜戦争の宣戦が布告された翌年の昭和十七年に、彼等は陸軍少尉に任官した。西妻少尉は、操縦技量抜群なるゆえをもって、陸軍の新鋭試作機の各種実験のためにつくられた、立川市外の福生飛行場（現米軍横田基地）にある陸軍航空審査部にテスト・パイロット兼務で配属された。

ここは陸軍の最新鋭の試作機のテスト、それにアメリカ、イギリス両軍からの獲機や、同盟国であるドイツ、イタリヤ軍から交換取得した飛行機などの性能を試験する、陸軍の最高機密基地の一つである。混血の彼がここに勤務できたのも、外交官である父親の七光りでなく、軍当局が人種偏見を持っていなかった証拠でもあろう。

したがって、西妻少尉はここでも毎日快適な飛行生活を過ごした。愛機を駆ってさっそうと大空から舞い降りるや、純白のマフラーを風になびかせ大股でピストに向かう彼の姿を、女子軍属や挺身隊の女学生が、外国映画のヒーローでも見るように、うっとりとしたと見とれた。

しかし、たまには困惑する場面もあった。彼がテストのために、ろ獲機やドイツのメッサーシュミットによく似ている水冷の三式戦闘機「飛燕」を操縦して、よその飛行場に味方識別信号を出した後に着陸すると、いくら飛行服に

少尉の階級章をつけていても、よく米兵に間違われて困ることがあるので、隊長の許可を得て飛行服の両袖に「日の丸」を縫いつけることにした。けれども、西妻少尉はこのように多少は不快なことがあっても、父から受け継いだ熱烈な祖国愛はその程度では少しも揺るがなかった。

また西妻少尉は、部下を愛し信頼した。たまの日曜日は、平河町の広荘な彼の邸宅に福生から多くの部下を連れて来て、家族ぐるみで大いに歓待した。

この頃、滅多なことではお目にかかれない洋食が出て、武者揃いの連中だけに作法も知らず、ただへきえきするばかりのうえ、日本酒を飲むように洋酒を鯨飲し大騒ぎした。特に、日頃西妻が自慢する彼の母ジャネット夫人にうり二つの、ブロンドの妹たちに日本語でお酌されると、さすがの鬼軍曹どもも、まるで自分が洋画の主人公にでもなったかのようにポーッとするばかりであった。こんな時には決まって、「おーい！ 貴様達、そんなにデレーツとするなよ。歌でも歌おうや」と、蛮声を張りあげ、彼の十番である禪一つの踊りと、「加藤隼戦闘隊」の軍歌合唱でひと時を過ごすのが常だった。我が息子のこのようなやんちゃな光景を微笑みながら静かに見守る母ジャネット夫人は、（日本男児としてよく育ってくれた）とひそかに安堵とたのもしさを覚えたのであった。

緒戦の華々しい勝ちいくさから一転して、物量を誇る敵の大反攻作戦によって戦局がじりじりと日本に不利になってきた昭和十九年に、西妻少尉は陸軍中尉に昇任した。平時と比較すれば異例な早い昇進だが、戦局が不利になるにつれ有能な第一線の中堅指揮官が相次いで戦死したためである。航空部隊では特にそれが早かった。

この年の十一月にサイパン島を占領した米軍は、ここに大航空基地を整備し、B 29による日本本土への高々度偵察飛行を開始した。

予告なしに、まっ青に澄みきった空をまっ白な飛行機雲を引きながら飛行する敵機に対して、味方の防空戦闘機も高射砲の弾丸も全く届かず、傍若無人に跳梁されるばかりであった。防空壕の中からひそかにこの情景を見つめた七百万の東京都民は、軍の無策を批判しながらも、ただ切齒扼腕するのみであった。

西妻中尉として思えば同じである。飛行場の退避壕の中で、多くの戦闘機パイロットと共に、無念やるかたなくただ天を仰ぐばかりであった。

B 29の空襲はこれが初めてではない。この年の七月には、中国大陸の成都から発進した敵機は九州の八幡地区にある製鉄所爆撃のため数次にわたり来襲したが、わが防空

戦隊の果敢な体当たり迎撃戦と支那派遣軍の敵基地覆滅作戦が成功し、敵は一時わが本土進攻を断念したかのように見えた。しかしサイパン、テニアン両基地が逐次整備を終わると、従来の単機による偵察行動から、大編隊をもってする本格的な本土進攻作戦が開始された。

当初、敵は三菱、中島(現富士重工)等の飛行機製作工場を爆撃目標にしていたが、ルメー少将が指揮官になるや、各都市に対する無差別の焼夷攻撃へと作戦を変更した。

夜な夜な、空襲を受けて燃える紅蓮の炎を見るにつけ、西妻は怒り心頭に達した。

(よし！ 同じ血を引いているやつらだが、おれは日本人、何としてもたたき墜としてやるぞ！)

彼は同期生たちと計り、防空戦隊に転属を願い出た。だが西妻中尉の願いは却下された。彼が混血児という理由からではなく、彼のテストパイロットとしての優秀な素質と技量を惜しむからであり、またB 29に対抗できる戦闘機の試作開発テストが軍にとって急を要することであるからであった。しかし、彼は事あるごとに、上司に対し防空戦隊への転属願を執拗に繰り返した。

無人の野を行くように敵機がわが上空を嘲弄するありさまを見て、戦闘機乗りの本能である「見敵必墜」の気構え

もさることながら、白人優位の気持を常に抱く彼らアンゲロ・サクソンに敗けるもんかという、大和魂の血がたぎっていたからである。

(四)

彼の熱烈な希望は受理され、あこがれの防空戦隊への転属がかなえられた。

西妻中尉は、都心に最も近い調布飛行場に展開している第十飛行師団の飛行第二四四戦隊付に発令された。この戦隊は皇居を直衛する任務を与えられた優秀な部隊で、自ら「近衛戦闘機隊」と自負し、またその奮闘ぶりは連日のように新聞紙上をにぎわしていた。機種も三式戦からキール100といわれた五式戦に機種変更中の七百万都民期待の防空戦隊である。

身の回り品を詰めた落下傘バッグ一つという軽装で戦隊本部に到着した彼は、戦隊長小林少佐に申告の後に、ピスト側にある戦闘指揮所に出てみた。

西の空にあざやかなシルエツトを描く富士山とは対照的に、迷彩を施した基地の内部は何となく薄汚れてはいるが、数十機がずらりと一線に並んでどうどうたる爆音を立てながら試運転をしている三式戦や、精悍な五式戦の群を眺めたり、黒光りする砲口を空に向けて対空高射機砲陣地の回りを忙しく立ち回る兵隊たちの姿を見ると、

(実戦部隊は、やはり違うわい！)

と感嘆するとともに、彼は勃然と湧き出る闘魂に思わず武者ぶるいを覚えた。と同時に、入隊前に交わした父とのやりとりの時の光景が彼の脳裏によみがえった。

外交官を勤める父に、西妻は彼の信念を訴えた。

「僕は外交というのは砂浜にものを描くようなものだと思います。いくら条約を作り、親善関係を結んでも、しょせん国の利害衝突という大浪が打ち寄せてくればあと方もなく消えてしまいます。僕はそんなほかない仕事よりは、軍人になりたいのです。そしてお父さんがよく口にする、この美しい日本の防人になります。」

父の意志に反し軍人になった西妻中尉は、今この本土防空戦隊に着任して、つくづく男真利に尽きたと思った。

この基地でも、ご他聞にもれず彼の容貌と優秀な操縦技術はすぐうわさになった。またその上、時々似つかわしくないモンペ姿で面会に来る美しいブロードの妹たちの姿が、緊迫した戦局とは別に、結構明るい彩りをそえた。

そんなこととは別に、中隊付将校として第一中隊に配属になった彼は、三重県明野市にある戦闘機専門課程の明野飛行学校の甲種学生を優秀な成績で出たうえ、実戦経験も豊富な小林戦隊長から、ノモンハン当時の単機上格闘戦から脱皮した四機編隊による近代の編隊戦闘術の特訓を受け

るや、ただちにB 29の迎撃任務に就いた。

(五)

西妻中尉の初陣は、四機の編隊長として、前年の師走から関東地区に大規模に侵入し始めたB 29に対する迎撃戦であった。

そのころ、どうやら精度を高めてきた電波警戒機のお陰で、戦隊の戦闘機が適時適切に離陸できるようになったが、完全装備の三式戦では七千五百呎以上は上昇が不可能であり、せっかく銚子沖合で空中待機していても、機体がふらつき編隊を組むのが精いっぱいでも戦いにはならず、悠然と味方編隊の上を飛び去る敵機を仰いで、ただ歯ざしりするばかりであった。

戦隊の朗報といえ、二〇ミリと一二・七ミリ各二門、計四門の機関砲を装備する三式戦が到着したと、不必要な積載物を外して上昇性能を向上させた、体当たり専門の「葉隠特攻隊」による「空中馬乗り」攻撃で、「撃墜破八機」という大戦果を挙げながら、操縦士は全員落下傘降下し無事基地に帰還したということであった。

無念やるかたなく着陸した西妻中尉は、戦隊指揮所の地下壕にある特殊情報班に立ち寄ってみた。敵の交信を傍受している無線機から鮮明に流れでる敵のB 29フォーメーション(編隊)間の会話を聞いたのである。

「ヘーイ、ジャップのカミカゼは命知らずだからアテンション(注意)せよ」

「三式戦(トニー)や零戦は、エンジンのパワー不足でここまで上がれんよ」

「トニーばかりではないよ。AW(高射砲)も下の方でお花畑さ」

日本語以上に英語に強い西妻中尉は、味方を侮蔑しきつた彼らの会話を聞くと激しい怒りを覚えた。

しかしながら戦隊は徐々にではあるが、体当たり以外の迎撃作戦でもB 29の撃墜に成功するようになった。戦闘機から不必要な搭載物を外して上昇力の向上に努めたためと、敵も爆撃精度を高めるため高度を一万呎から七千八千呎に下げたこと、また敵の進入コースが、富士山を目標に伊豆七島を経て山梨県の大月付近で偏西風に乗る、国鉄中央本線沿いに東進して鹿島灘から退去するパターンをとったので、「待ち伏せ攻撃」ができたからである。

だが、何といっても「いくさ」は慣れである。今までの迎撃は、B 29の図体が大きいのでついつい眩惑され、B 29の機体に十分に接近したものと勘違いをして有効射程外から撃ってしまうので、どうしても致命傷を与えることができなかった。以来、戦隊は、「肉を斬らして骨を断つ」のとたとえどおり、全機一丸、火の玉となり敵との「刺し違え

戦法”をもって突っ込んだ。

西妻中尉も編隊長として、猛烈な敵の火網に目もくれず、体当たり覚悟で急降下した。まるで体育館の大屋根のトタンに全速で飛び込むような錯覚さえ起こした。敵機がみるみる照準眼鏡いっぱいになり大寫しになったが、(まだ、まだ!)とはやる気持ちを押さえて操縦桿を倒し続け、B29の機体が照準眼鏡をはみ出した瞬間、その翼の付け根めがけて機関銃の発射ボタンを押す。そうすると、曳光弾がきれいに吸い込まれ手ごたえを感じる。あわや衝突と思う寸前に右側に機体をすべらせ、操縦桿を力いっぱい引いて上げ舵をとる。一瞬、体が座席にめり込み、目の前が真っ暗になる。敵機は? と左下方を見ると四発のエンジン付け根あたりからパツと火を吹き出した。そのうち敵機は空中に静止したと思うや、ぐらりと傾き機首を下にぐるぐるっと緩く回しながら墜落を始めた。巨人機B29のものすごいブルルだ。ちようどスローモーション映画を見ているようだ。

(やったぞ! ついにやったぞ!)

と快哉を叫んだが、母の祖国であるアメリカの軍人が乗っていると思うと、何か言い知れぬ悲しさを感じた。しかし、それもつかの間、

(これは「いくさ」だ)

と割り切ると、西妻中尉は次の敵を求めて再び紺碧の空に向かつて翼をひるがえした。

(六)

首都東京を守る「近衛戦闘隊」と自負し、天皇陛下から三回にわたり「ご嘉賞」の御言葉をいただき、また多くの市民から尊敬されている飛行第二四四戦隊も、機種を三式戦から逐次新鋭の五式戦に改変し近代化した。

その頃海軍では、源田実海軍大佐(元空将・空幕長・元参議院議員)が陸軍の五式戦と同性能を持つ新鋭の局地戦闘機「紫電改」をもって四国の松山基地に第三四三航空隊を編成し戦果をあげていた。特に同航空隊は、昭和二十年三月十九日、呉軍港に來襲した敵グラマンとヘルキャット百五十機と遭遇し、そのうち約半分の六十四機を撃墜し、味方の損害はわずかに九機という大戦果をあげた。

陸軍としても、海軍をライバル視するわけではないが、皇居直衛という重要な任務をもち、歴戦パイロットの蟄集するこの戦隊に、最新鋭戦闘機である五式戦配備の白羽の矢を当てたのである。

別名「キ-100」と呼ばれ、すばらしい上昇能力と成層圏での与圧高度を充分に保てるこの戦闘機は、実をいえば三式戦「飛燕」の液冷式エンジンの生産力不足から、首なし飛燕の胴体に、苦肉の策として三菱製の「ハ-112」という

空冷星型エンジンを取り付けたところ、最大速度が高度六千呎で六一〇キ、航続距離二千キという予想外の高性能を発揮したものであり、この戦闘機が海軍の紫電改と共に、もう一年前に完成していたらと関係者をくやしがらせた、軍当局期待の戦闘機である。

五式戦を配当された戦隊の士気は、天を突くものがあった。だが、硫黄島が失陥すると、B-29の援護にP-51戦闘機（ムスタング）が加入し、またそのうえ敵空母機動部隊による艦載機攻撃もあり、隊の迎撃戦闘も寧日なく、いくら優秀な五式戦でも、終戦の日までの総生産機数がわずか三三四機という有様では、飛行機の補充もままならず、戦隊としても相当数の敵を撃墜したものの、その陰では未帰還機の数も目を追って多くなった。

戦隊長小林少佐自身も、B-29を撃墜したのち、自らもエンジン射抜かれ、かろうじて落下傘降下し、大月の山中に降下したため重傷を負い、民間人に救出されるまで一時行くえ不明となったのをはじめ、戦隊の全操縦士は完全に疲労困ぱいしきっていた。そのため師団司令部は、天気図に不連続線が張り出しているのを利用し、戦隊の迎撃任務をはずして機体の整備と操縦士の休養を図ることにした。

久々にベッドの上に大の字になった西妻中尉は、連日に

わたる緊張の連続で神経が極度にたかぶっているせいか、頭が冴えてなかなか眠れなかった。そんな彼の脳裏に、競争中に交換船で帰国したときの父の言葉がよみがえった。

「譲治、今度の戦争の原因はいろいろある。だが、究極は白人種対黄色人種の戦いでもある。現在米国は、日本が主張する「大東亜共栄圏」なるものは日本の一方的な宣伝にすぎないと言っているが、有識層の中には、このような見方を否定する人も少くない。たとえば有名な作家であるパール・バック夫人もルーズベルトあてに、『すべてのアジア人には、「白人は共通の敵である」という感覚があり、現在敵対している中国と日本さえも、白人に対しては有色人種の誼として団結して立ち挙がる可能性があります。知人である中国人の大学教授が私に、「日本人は今わが敵であるが、最後の選択の段階に来れば、われわれ中国人は米国よりも日本の属国になるほうを選ぶだろう。なぜならば、日本人はわれわれ中国人を劣等民族と見ていないからだ」と言っていました。たしかに私たち白色人種は、共通の皮膚の色に結ばれた全く新しい人種の提携が、今度の戦争の中から必ずや生まれてくる、という事実を認識しなければなりません」と警告をしている。このように、皮膚の色というものは何にもたどえることのできない何かを作

用する可能性を秘めているのだ。

讓治はおれの息子であるが、肌の色は全くお母さんゆずりだ。しかしお前はれっきとした日本人だ。日本人はどんな最悪の事態に陥っても、「何か」を持って立ちあがれる国民だ。讓治も日本軍人としてサムシングを失ってはならない。

暖かい父のはなむけのことばを思い起こした西妻は、(そうだ、いま日本は有史以来最悪の時期だ。がんばるぞ。と、日本人としての闘志を湧き立たせた。

(七)

久しぶりに休養をとった飛行第二四四戦隊は、敵機動部隊が日本本土に接近中という情報で、全パイロットが五式戦闘機に搭乗し、その三分の一がエンジンを回転させるといふ、非常戦備について。

B 29と違い、敵も最優秀搭乗員で編成している空母艦載の宿敵グラマンF 6Fシコルスキーである。戦闘機乗りには本質的に、爆撃機や偵察機を攻撃するよりも敵戦闘機と格闘したいという気持と欲望がある。

(今日の出撃戦闘では思う存分やるぞ！)
という気配が、全戦隊に満ちあふれた。

「非常戦備発令」とともに小林戦隊長より細部の指示を受けた。そして全パイロットは皆それぞれの愛機に搭乗し、準備線に勢ぞろいした。

傷が完全に癒えきらない小林少佐(陸軍航空士官学校第五十三期、戦後航空自衛隊のF-186ジェット戦闘機隊長、浜松基地でエンジントラブルで殉職、一等空佐)の発進合図で、四十二機の五式戦はごうごうたるエンジンの音も高らかに、整備兵や飛行場勤務の兵隊たちの打ち振る旗の波と喚呼の声の中、全機帝都上空めざして離陸した。気速をつけながら各機思い思いに機関砲の試射をすると、地上の飛行師団司令部から敵情が刻々とレシーバーにはいつてくる。

そのうち、敵の攻撃目標が立川市方面ということで、東京上空から全機いっせいに変針し立川に向かう。立川上空に到着した西妻たちはじゅうぶんに高度をとり、雲間を遊弋しながら空中待機を続ける。

西妻中尉も碧いひとみを凝らし僚機とともに索敵を続けると、はるか八王子の方向できらきらと光るものが見える。

よく見るとグラマンの風防が太陽光線に反射しているのだ。やがてきらきらするものが黒胡麻を空いっぱいにもぎ散らしたようになる。グラマンの大編隊である。何個梯団にも分かれてこちらに向かってくる。その数およそ百機、味方の機数は少ないが、空中戦の必須条件である高空優位を十分に保って重層配備をとる。そのうえ、後方上空よ

り、厚木に在る小園安名海軍大佐の指揮する海軍第三〇二航空隊の雷電や零戦の精鋭が、翼をバンクしながら続々と応援に駆けつけてくる。

(ようし、今日のいくさはもらったぞ！)

西妻中尉は僚機を振り返ると、風防の中から部下たちに白い歯を見せ、こぶしをあげ全機撃墜の合図を送る。

「サクラ全機、十時の方向」

戦隊長の無線暗号命令で増加タンクを切り離し、全機いっせいに太陽を背にするよう五式戦の群はグラマンの後ろに回りこみ、絶対に有利な態勢をとる。敵はまだこちらに気づかない。

絶対有利の態勢のまま、敵大編隊の頭上にさしかかったとき、戦隊長は急激に翼を振り真逆さまに敵機目がけて突っ込むや、全機いっせいに戦隊長にならって急降下する。

西妻が外側の敵編隊長を目標にとりレバーを全開にし、操縦桿を前いっぱいにおすと、「虻」(アブ)のようにズングリした機体が見る間に眼鏡いっぱいになる。敵機を捕捉した西妻が操縦桿についている機関砲の発射ボタンを思い切り押すと、口径二〇ミリ二門と一二・七ミリ二門計四門の砲口から曳光弾が奔流のごとく敵機に吸い込まれる。のたうちながら逃げ廻るグラマンは一瞬のうちに空中爆発を起こした。

西妻は撃墜を確認するまもなく離脱操作を行い、体にかかるといかる「G」(重力の加速度)をこらえながら最大速度で急上昇した。

戦いは味方の大勝利だ。敵の第一波を一撃のもとにほとんど全機撃墜した。上空から地上を見ると、撃墜した敵機の炎上する黒煙が、関東平野のあちこちで野火のように立ち昇っている。

更に次の獲物はと高度をとった彼が索敵をすると、はるか下方にただ一機ふらふらとさまよっているグラマンが見えた。

西妻は後上方を見て敵機のいないことを確認するや、愛機をひとひねりして接敵に移った。しかし敵もさる者、こちらの殺気を感じたのか、急旋回で味方編隊の軸線はずすや急降下で離脱したが、そうさせじと西妻は執拗に追随する。

みるみる敵との距離が縮まり、敵パイロットの恐怖に満ちた顔がはつきりわかる。やがて恐怖の色は哀願の色に変化した。

(そうだ、こやつを機体ごと捕虜にしてやれ)

そう思った西妻中尉は僚機に無線連絡した。

「サクラ五番、敵が空母に行かないよう、退路を断て」と命令を下し、敵が青梅の山中に機首を向けるように、

僚機と交互に後上方から偽攻撃を始めた。敵の鼻先にむけて、ばらばらっとおどかしに撃ったのである。

やがて西妻は単機で急上昇反転して、蛇行する敵機の側方に編隊でも組むようにびたりとつき、風防を開いて調布基地の方向を指さし、その方向に飛ばないと撃墜するぜスチャーを示した。

この西妻中尉の退路しや断と威嚇作戦はみごとに凶にいたり、敵のパイロットはすっかり観念した。

僚機に上空からの見張りを続けさせているうちに、西妻は敵パイロットに胴体着陸を命じた。

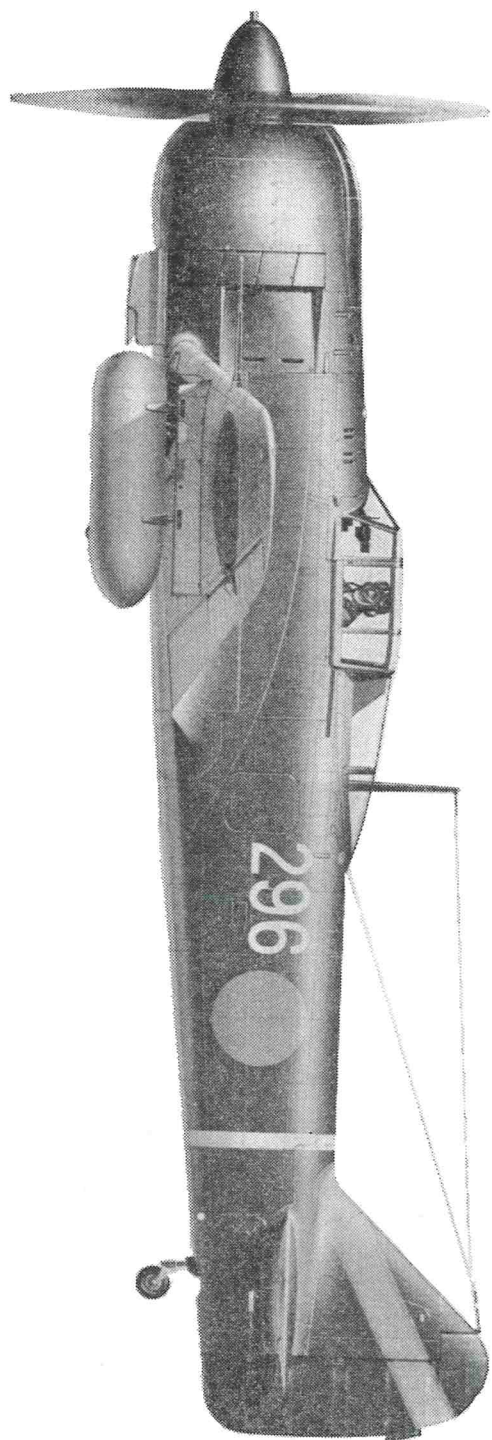
撃墜六十二機、撃破二十七機という大戦果の外に、この思いがけない大捕物に兵隊たちが小躍りして喜んでいるのが地上によく見える。脚を出せないグラマンと、脚を下げフラップを全開にした五式戦は奇妙な取り合わせである。

物すごい土煙りをあげ滑走路外の芝地に胴体着陸した後ろから、滑走路上にびたりと三点着陸した西妻中尉は、その長身も軽やかに愛機からひらりと飛び降り、剣付の三八式小銃を持った飛行場大隊の兵隊たちに取り囲まれている敵パイロットの所につかつかと歩み寄った。その瞬間、恐怖に青ざめて顔をこわ張らしている敵パイロットは、西妻の顔を見るやげげんな様子で、

※P・11上段末尾に続く。



(B-29爆撃機ソウルの総合安保展示場にて) (アクロバット飛行を楽しむ新妻・元一空佐)



(陸軍の五式戦闘機 (キ一100))

自衛隊だより

警務官勤務24年に思う

一陸曹 土門 為保
(仙台・東北方警本部)

昭和三十九年八月末、肌寒い霧と風の
中、北見枝幸駅を姉らに見送られ、不安と
期待半々に真駒内駐屯地に入隊。以来遠
軽、名寄と普通科勤務。あの頃の同僚はど
うしているだろうか。

昭和四十五年、警務官を拝命。じ来今日
まで自衛官として、また警務官として部内
秩序維持の職務に専従し邁進してきた。警
務官となって事件・事故などの取り扱いは
数かぎりないが、この中でとくに勉強させ
られたのは「権限の行使と人権」である。

刑事訴訟法の目的とする「個人の基本的
人権の保障」と「事案の真相を明らかにす
る」この二節については、捜査を行う上に
おいて奥深いものがあることを痛感させら

れるとともに、「罪を罰して人を罰せず」
を忘れずに歩み続けたいと思う。

ところで、事件・事故などを取り扱って
きた中で、「警務隊(警務官)とはどんな部
隊(隊員)なのか」とか「隊内の事件・事
故も警務官が取り扱うのだろうか」などと思
っている人がいるようだが、警務官(警務
官補)の司法権の根拠は、刑事訴訟法第一
九〇条(特別司法警察職員)及び自衛隊法
第九六条(部内の秩序維持に専従する者の
権限)により一般的には隊内(自衛隊施設)
において発生した隊員間の犯罪、隊員の犯
した犯罪、公務に従事中の隊員に対する犯
罪は警務官が犯罪捜査をおこなうことにな
っている。

初心にかえって

技官 松田 英子
(出雲・三二二基通中)

入隊して八年、「マンネリだ」という上
司の言葉に、そんなことはない一瞬否定
が頭の中を横ぎったものの、思いあたるこ
とが一つ二つ。確かに最近の私は、ある一

定線で立ち止まったままの気がする。

「ぎこちないが、精いっぱいの応対をして
いた入隊当初、競技会入賞をめざし、何度
も練習をくりかえした四年前、交換機も自
動化へと変わり、応対操作にサービスのゆ
とりをもてる分、もっと向上してもいいは
ずなのに、知らず知らずのうちに慣れと甘
えの中で安心していた。

今からでも遅くはない。初心にかえって
やり直そう——交換手は駐屯地の声の窓口
なのだと言い聞かせる。

「はい、出雲自衛隊です」。

毎日幾度となくくりかえすありきたりの
言葉が、明るく、気持ちよく、相手の耳に
届くよう、今日も交換台に向かう。

(以上・朝雲)

※P・60下段末尾より続く。

「陛下ご不例の折からではあるが、ご平癒
を願いつつ、一人いちにんの会員獲得に努
力して欲しい旨の訓示があり、後佐々木理
事長司会のもと月例理事会を開き、当面の
日程、及び「建国記念の日」の行事につい
て検討し、互礼会を終った。

自衛隊今は昔の物語

牧野良祥(防衛庁航空幕僚監部・二佐)

濡れネズミ

ドッポン! くるりと空中に弧を描いて、本官は水音も高く、川の中にほおりこまれていた。

いや驚いたのなんのって、そして、その水の冷めたこと。秋とはいえ、結構ズーンと身に沁みる。幸い、

川は浅くて腰ぐらいの深さだったから、溺れるおそれはないが、全身ずぶ濡れ。おまけに、ほおりこまれた瞬間に、汚れた川の水も、いくらか飲みこんでいる。

口の中の水をはき出しつつ、本官はあわてて身を起し、濡れネズミ姿で川の中に仁王立ち、そして、してやったりと、クモの子を散らすように逃げ去る連中に向かって、寒さよ

り口惜しさで、おこりのように震えながら、本官はどなっていた。

「覚えちよれッ! このお返しは、さっとするけんな!」

その夜、本官はベッドの中で、ひとり涙をこぼした。男のくせに泣いたりしてと、母さんが悲しそうに言う顔が、目に浮かんだ。

ポロリとこぼれた涙が、なぐられてはれた頬をつたって流れると、チリッと痛み、また口惜しさがこみ上げた。

あのあと、まるでドブねずみのように川岸の石垣を



はい上ろうとしていると、通りがかりの人や、近所の人か何人か駆け寄り、引っ張り上げてくれた。その親切な人々へのお礼の言葉もそこそこに、本官は逃げるようにその場を離れた。

なにしろ、オonan十八歳、全身ずぶ濡れというブザマな姿を、人眼にさらすなど、若いモンにとつて、耐えられるものではない。

次の日曜日、本官は例の場所に立っていた。一日がかりの連中の「捜索」に、本官はいささかたびれていた。だいいち連中の名前も知らない

ければ、住んでる場所も知らないのだから、捜しようがないのである。とにかく町の中を歩きまわり、それらしき若い男を見かけたら、確認

するという方法しかない。

(仕方なか……)

本官は、来週の日曜日にまた来ようと思いなおして、睡を返そうとした。

その時であった。本官は、とび上った。あいつがいた。

連中の中の「首謀者」がクリーニング屋の自転車に

乗り、口笛を吹きながら、やって来るではないか。

(ああ、神いまだ我を見捨て給わず)、本官ははやる心をおさえつつ、あいつの行く手に立ちふさがった。

(航空自衛隊連合幹部会機関誌「翼」編集者)

奇跡の生還(2)

森松俊夫

(軍事史研究家)

ボongaオ島からの脱出

わが方の陣地は、ほとんど敵に察知されたと思われるので、十八日夜、第一中隊は三一七高地、第二中隊は四一五高地の第二陣地へ移動した。

陣地は、自然の洞窟を利用し、艦砲射撃にもビクともせぬ堅固な岩盤であった。

夜が明けると、敵は相変らず第一陣地を目標に盲射を続けていた。翌日も、また次の日も同様である。この間、中隊は、芋堀り部隊を編成し、食料確保に努めた。

二十三日、派遣隊長は、陸戦隊および直轄機関の准士官以上を集め、派遣隊今後の行動について協議させた。いろいろ意見が出たのち、隊長は、「本島から最短距離で、日本軍が居ると思われる北ボルネオに向かい転進する」と決心し、その準備を命じた。

転進といっても舟がない。まず筏を作ることにした。

筏は、約一五名で一個を作る。材料はジャングルから木や竹を切り出し、蔓を取ってきて、これをしぼるのであるが、敵に企図を察知されないよう、穩密にやるのは非常に困難な作業であった。

姿を現わさぬよう、音を立てないよう筏作りの作業を進めた。施設部の連中は、兵舎の板をとってきて、箱舟を造っていた。

二十六日、各隊の筏はほとんど完成したが、つぎの問題は、敵包囲の間隙をねらい、どこから出発するかである。内海中尉は一コ小隊つれて偵察に出たところ、幸運にも、島の北西海岸に好適の地を見つけた。付近には住民の姿はなく、敵巡察の跡もない。

早速、中隊長に報告し、計画どおり、T

小隊が先遣として無事出発した。

翌二十七日、総員一率に出発と決定された。筏は二〇数隻なので、出発に手間どる敵に察知された場合、残る者が気の毒だから、死ねば諸共にといい考えである。

出発を十八時とした。この時刻はまだ明るい。暗くなると潮流が反対方向となるのでやむをえない。

十四時出発命令が下った。総員集合し、隊長から別れの挨拶があり、お互にボルネオでの再会を約したのち、各人に手榴弾二個を持たせた。敵に発見されたら、現地人をよそおって近づき、敵船に乗り込み自爆せよということだ。

各筏は、食糧としてヤシの実数十個、缶詰一人一個、握り飯一人数個、水などを積み込んだ。

海岸線に出て見ると、沖には米軍艦船が

ずらりと並んでいた。

筏を海に浮べ出発を用意した。時刻がくると、全筏は必死になって、われ先にと漕ぎ出し、自分さえ他より早くこの島を離れば助かるのだという心理から、懸命に筏を沖に進めていった。

夕闇迫るころ、内海中尉は、ふとわれに返えり、海上を見渡したが、各筏は、てんでバラバラになって見えず、自分たちが乗る箱舟だけとなっていた。

暗くなってから、敵の水上飛行艇が低空で飛来したが、無事発見されず、全員胸をなで下した。その夜は、腕にはめた磁石を頼りに、全員が力を合わせて漕いだ。いつしかボンガオ島の姿が見えなくなり、大海原を漂っていた。

東の空が白むころ、誰かが「島だ！ 島だ！」と歓声を挙げた。まぎれもなく島である。「ボルネオだ！」それゆけと、全員力漕した。

十時ごろ、島のヤシの木がマツチ棒の大きさで一本一本数えられるほどになった。

ところがこのとき、海上にさざ波が立ち箱舟の方に向かってくる。「イルカの大群

だ！」と、手榴弾の準備をしていた。さざ波はあつという間もなく近づいてきた。それは、三角波を立ててくる干潮であった。箱舟は、沖へ沖へと流され、島は遠くにかすんでしまった。

みんな呆然として、力が抜け、声を出す者もない。

やがて内海中尉は気を取りなおして、みんなを励まし、腹ごしらえをして漕ぎ始めた。再びヤシの木がマツチ棒のように見えるようになってきた。

十四時ごろ、敵機を発見した。内海は、「平然として漕げ」と命じた。敵機は頭上すれすれに通過して、再び反転してきた。今度は、「全員、手を振れ」と命じた。敵機の搭乗員、機上から身を乗り出し、写真をとって飛び去った。

地獄のボルネオ

二十三時ごろ、舟はザ、と浅瀬に乗り上げた。「ボルネオに着いたぞ！」全員抱き合って喜んだ。

偵察をしてみると、ここはボルネオの東北端、タンピサンという所で、原住民は日本軍に協力的であり、米軍はまだ上陸して

いないとのことである。原住民の家で厄介になり休息した。

ボンガオ島から海上約八〇キロ、よくも漕破したものである。

数日後、体力も回復したので、原住民にコンピーツ（大型の舟）を出してもらい、陸軍部隊の居る所へ向かい出発した。

敵の制空権下であるので、夜間だけ、海岸沿いに、マングローブの繁みのそばを静かに漕いでいった。

途中、陸軍の分遣隊で一泊し、海上一二六キロを漕いで、五月十七日夜、サンダカに到着、疲れ切った身体に鞭打ち、第一南遣艦隊第六震洋隊の兵舎に行った。そこで先任士官に申告し、同隊に編入された。

数日の休養ののち、敵の上陸あるいは艦砲射撃に備えての陣地構築に参加した。しかし、敵機は全く姿を見せず、平穏な毎日が続いた。

しかし、ボンガオ島からの転進組は、相当地に体力が衰弱していたので、悪性の熱帯性マラリアにかかると多く、内海中尉も、死ぬほどの苦しみを味った。助かったのは、全く親切なD軍医のお陰である。

空襲が激しくなってきた。住民を立退かせるため、口説いたり、食糧を与えたり、散々苦勞した。

日本軍の劣勢を察知した現地人は、次第に非協力的となった。あるとき兵補（現地人のうち、日本軍に入れられた兵）が、兵器弾薬を持ち出し逃亡する事件が起こった。陸軍部隊からの要請により、海軍側も協力して搜索した。

四日間、内海中尉はやっと逃亡兵を発見、逮捕して、陸軍部隊に電話連絡した。すると部隊参謀は、「兵補は日本軍人と同様の規律を守らねばならぬ。戦場における逃亡は銃殺刑であるから、処分してくれ」という。内海は「陸軍部隊の兵補だから陸軍部隊に送ります」と頑張り、陸軍だ、海軍だとやり合った。

しかし陸軍の参謀が、強引に「ぜひ頼む」と押しつけてきたので、やむなく部下に命じ処分した。

その後、情勢が変化し、終戦になったことを、九月上旬になって知った。

十月二十七日、豪州軍が艦艇、輸送船を並べ、サンダカン沖から上陸し、即日、日

本軍の武装解除を実施した。

丸腰になった日本軍将兵は、三十日から行軍を始めた。どこにつれてゆかれるのか全く分らない。翌日も、また次の日も行軍である。まず病人が斃れ、栄養失調で体力を失った者が落伍していった。みな自分が歩くだけで精一杯であり、お互いに助け合うこともできない。まさに「死の行軍」である。

何日か歩き続け、やっと鉄条網を張りめぐらしたテント村に着いた。収容所である。男女別、地区別、軍人別に収容された。ここはゼツセルケントという所であった。

テント生活は食事と洗濯のほかは何の用もなく、安泰であるが空腹でたまらぬ毎日であった。

十一月十七日、内海中尉は険悪な空気に感じた。はたして午前中に豪軍将校に呼び出され、簡単な取調べを受けた。午後、再び呼び出され、他の数名の者とともに「特別区」行きを命じられた。理由は何も示されない。特別区は地獄だという噂は聞いていた。

内海が特別区に入ったとき、すでに八名の陸軍兵がいた。しかし翌日、六名が他の収容所に移され、二名は無罪となって帰隊し、内海一人となった。豪州兵は暇を持てあまし、内海をなぶりものにした。半日、炎天下で不動の姿勢をとらせたり、往復駆け足をやらして監視兵の前を通るたびにコン棒で尻をなぐったり、石砕り作業をさせられた。内海よりあとから入ってきた軍属の一人は、リンチのため斃れ死亡した。

二十四日、内海はラブアン島戦犯収容所に拘引された。サンダカン逃亡兵処分事件によるものらしい。ここで六ヶ月の地獄の生活を送った。

二十一年五月末、豪軍から「日本に帰してやる」と伝えられて乗船し、船内でリンチを加えられつつ到着したのは、高い塀の前である。鉄の大きな扉にはチャンギ刑務所と書いてあった。万事休す。

内海が九死に一生を得て、日本に帰還後に調査したところでは、ボンガオ派遣隊の生還者は一三名であった。



富山県支部だより

役員研修会実施

十一月二十三日午後一時三十分より役員研修会を開催し、役員会は昭和六十三年度上半期事業報告並びに下半期事業計画を承認し、特に会勢の拡充が強調され、婦人部、青少年部の組織の整備拡充と郷政連活動として自民党集団入党、明年の参院選対策田村秀昭全国統一候補の支持者名簿の拡大、第二次連盟基金の募金、北方領土返還要求署名簿の拡大、防衛問題、間接侵略の抑止対策に具体的成果を挙げることを討議し且つ決議された。

幹部研修会は引続き午後三時より開催され、重点事項として、瀬川会長より北方領土返還要求全国代表者会議の参加報告に続いてソ連に対する返還要求は、日本対ソ連の一国対一国のみの交渉だけでは解決は難しく、旧連合軍側諸国に国際公法に悖る大

東亜戦争の不法参戦、ヤルタ協定の不法法、亦ポツダム宣言を日本が受諾すれば、各地諸国に出征していた日本軍人を平和的生産的な業務を営ましむるため速やかに家に還すと宣言に規定されていたにも拘らず、ソ連は日本軍人を不法にも酷寒のシベリア地区に六年乃至十数年に亘る長期抑留を行い、然も囚人扱にして抑留したる非法をソ連政府に追及して、速やかに日本に返還するよう旧連合国にも非違を認めしめ、国際会議に諮り、各国の支援を求め強くソ連側に要求する外他に方法なしと力説、交渉し逐次成果を挙げて行くことに国論を広く喚起し、国際間折衝を行うこと、領海権も併せて導入施策することを論じた。

亦本年九月四日富士演習場に於いて実施された、陸上自衛隊実弾射撃火力演習の実地見学に鑑み、近代戦の特質はミサイル戦、戦車戦闘の最も重要なことで認められ、わが国の防衛費は最少限度GNPの三%を必要と思考され、政府国会並びに防衛庁に対し、早期予算獲得陳情と県内国会議員に対する陳情運動支援を強く展開するこ

と並びに近代兵器の進歩に就いて県民に対する啓蒙運動の必要性を交々語り合い研修し特に毎月号の郷友誌には防衛問題及び間接侵略の抑止に就いて詳しく論述されているので購読して居ない会員にも輪読せしめ自宅に於いても充分自主研修されるよう会長より会員に特に要望され、且つソ連のペレストロイカや、クラスノスチは全くソ連の偽装広報戦略で此の謀略に乗ってはならない。会員はお互いに心を引き緊めて防衛の要諦を把握する申合せを行い午後五時会長の閉会の挨拶を以て解散した。(瀬川記)

立山町郷友会婦人部

十一月三十日立山町郷友会婦人部に於いては、平素郷友会婦人部の為に忙しい家庭の業務の傍ら愛国の至誠に燃えて、婦人部の活動のため何時も種々とご尽力して下さい役員三十名の方々を慰労する会合を開催致しました。

此の三十名の方というのは男子役員二十四名女子役員六名でありまして、男子役員には何時も大変お世話になっている方々であります。何分にも花と薫った若い時代もいつしか過ぎ去り、次第に高齢化ともなれ

ば腰が痛い足が痛いやらでもう既に明けの明星とも言った方がびったり当る代名詞の様で、人生過去の夜長を光り輝いて来たのでありますから、身体中の何処其処と痛くなるのも当然のことでしょう。

そこで神経痛によく効くと云われる福井県の佐野温泉に一泊二日で出かけました。

行動の途中加賀越前大仏に参詣致し、先づ九月十九日以来天皇陛下の御病勢が日々加わり一同は洵に深憂に堪えませんでした、天皇陛下の御平癒を祈願して参拝を行いました。

今上陛下の御一代はほんとうに関東の大震災やら満州事変以来大東亜戦争の終結に至るまで、あれ程に世界の平和を愛好せられたるにも拘らず、十四ヶ年の久し間日夜不眠不休の御状態で御宸襟を悩ませ給いしこと。数々の御製を拝する毎に私達を身を抛って危難を救って下さいました誠に畏く辱なく恐れ多い過去の出来事のことども静かに恐察し私達の若かりし時代からの感激に堪へない話、思い出を繰り返し思い浮べて何度も合掌して御平癒を祈願し大仏に参拝致しました。

それから目的地に到着しない前に戦歿の英霊、物故会員の御霊に対し黙禱を捧げ御冥福を祈りましたが、これ亦往時を偲び誠に感慨無量でした。それから目的地佐野温泉に到着し、砂利湯に浸ったり、洗いますぎしている間に身心共に爽快となりました。

引き続き直会となりましたが御一行の方々の聡明なることに感心致しました。俳句でござれ、短歌でござれ、川柳でござれ、何でもござれで次々と発表されました。

其の一部をご紹介申し上げます。

手をそいて 親切こめての マッサージ

きくかきかぬか 知らぬ衛生兵 酒井

足腰の痛みを忘れて 老兵が

呑めや歌えと どんじやらほい 亀山

老兵も今宵ばかりは 若がえり

明日をも知らず 戦友いる国も 中川

山里の 干大根や 佐野温泉 若尾

収印帳 はじめて押さる 大仏寺 山林

山の上えにきらりと輝く 観音像 翁

マッサージ おれのも利くと

しやしやり出る 山本

湯につかり 飲んであがって又はいる

積永

思いも寄らぬ名句が出て楽しい慰安旅行で大変盛会でありました。

時代は次第に解放的となり、一連の平和ムードに世を挙げて流されて居りますが、一朝有事となる難局がないと誰が保証できます。郷友連の志士茲に在りと勉強しなければならぬ各種各様の運動推進の大切を思い起し、手に手を執って明日の活動を誓い合い探訪した元の道を迎って帰りの途を急ぎました。 「山田ハナ記」

熊本県支部だより

南京問題を語る会

(熊本県支部教育部長)

曾木 義信

昭和六十三年十二月十四日、熊本市の県福祉会館に於いて、第四回の標記の会を、県下の昭和十二年十二月の南京攻略参戦の方々を招いて、熊本県郷友連主催で開催した。

定刻十三時三十分開会、天皇陛下御病氣御平癒の祈願に続いて、五十一年前の南京戦で戦没の日支両軍將兵並びに罹災した一

般の人々への黙禱の後、矢野会長より挨拶、その中で特にこの会の目的、つまり事実を明らかにして、いやしくも誤った事柄や思想を子孫へ残すようなことなく、あくまでも真実を正しく子孫に伝えねばならぬ、という点が強調された。司会は佐野理事長によって行われ、先づ自己紹介があり、続いて司会より当時のあらましの経緯について説明の後、参会者の方々の実戦の体験の発表に移り、正に息づまるような戦況を聞いたのであるが、誰も虐殺なるものは見たこともなく、聞いたこともない、というのが参会者全員の声であった。

集った方々は、お互いに初めて会う人が多いのに、こんなに各自の話が一致しているのは、虐殺の事実がなかったことを証明している何よりの証拠ではなからうか。

従って虐殺の命令などは無論なく、集団的とか、計画的とか、又は虐殺の規模の大小などは、誰も噂にも聞かず、全然問題の対象とならず、たまたま虐殺肯定の発表等には、虚報が多々あることが、参戦者によって証明され、事実と反することが、巧妙な筆先で表現されているのが、衆目により

明らかにされた。

この会は昭和六十年十二月、教科書問題に端を発して第一回に始まって、毎年十二月に熊本郷友連が実施してきたもので、回を重ねるにつれ当時の実戦参加者もふえ、当初は数名であったが、今回は十八名、県下の遠地よりも参加いただいた。特に熊本の歩兵第十三連隊では、各中隊の方が揃われ、大勢を知る上に、極めて好都合であった。

今までこの会には、マスコミ関係の出席は無かったが、今年には熊本にある報道機関に案内したところ、熊本県民テレビと熊本日日新聞から、記者とカメラマンが取材に来て、熱心に取材、テレビ(KKT)は当日の夕刻に放映され、熊本日日新聞は翌朝十五日に報道された。

こうしてマスコミに取り上げられるに至ったことは、大きな進歩であり、誤った事実を是正して、真実を正しく子孫に伝える方向へ大きく歩きはじめたことに深く感謝するところである。

尚この会の成功の陰には、綿密に当時の名簿を調査したり、郷友事務の多忙の中

に、準備万端を惜しまず献身的につくして下さった熊本郷友連事務局一同のお力があつた事を記して筆を置く。

和歌山県支部だより

中芳養郷友会では昭和六十三年度の地区出身戦没者の慰霊祭を十二月一日午後一時より八幡神社境内にある忠魂碑前に於て、木下中芳養郷友会長祭主となり盛大に行なわれた。来賓として田辺市長(代理)、各種団体代表、県支部からは佐伯会長代表して参列した。遺族・消防団・一般市民・郷友会員等多数参列し英霊をしのんだ。式典後郷友会員により馬駆けが披露され、終了後、餅投げが行なわれ慰霊の一日を終った。

石川県支部だより

六十四年新年互礼会

石川県支部では、一月五日十時より郷友会館内において、役員出席のもとに新年互礼会を実施した。

当日は会長(杉野勝次)が年初に際して
※以下P・53末尾に続く。



郷友健壇

野島 一良選

徳山 洪谷 蘆水

妻とわれ卒寿の屠蘇を交はしけり

だいぶ長い間ご投句がないので、高齢のご体調が気にかかっていました。そこへしつかりとした筆跡の、しかも秀作を揃へられていて安心し、力強く感じました。お二人お揃いで白寿へと歩み続けられますようお祈りします。

卒寿われ四日はや出て農始め

第一句と同様よく判る句です。心の張りの伺える作品です。

七日粥茶柱も立ち芽出度けれ

七種粥を祝われた。湯呑みに茶を注げば茶柱が立った、そのままを句にせられた。素直で清々しい。

オリオンに庭梅仄かに香りけり

松山 重川 兵介

老いてなほ夢持ちつづけ初詣

初詣米寿の友の鬘鏡と

心して般若心経筆始

平成と御代改まり寒の雨

岩国 村井 一露

鳩の恋ふ湖心はるかに暁けそむる

節東風のかがやく浜に針魚干す

雪嶺を越え来し鴨をねらひ撃つ

真夜の木菟これより先に人家なし

神戸 泉 美冴

寒の入りぶつきらぼうに顔洗ふ

『ぶつきらぼうに顔洗ふ』は面白し。

その人物が何だか躍如として見えてくるようです。

釣銭に魚のにほふ冬の雨

魚屋の店頭に吊してある筈の中から掴んで渡された硬貨の釣銭。頬笑ましい描写ではある。第一句と共に生き生きとして迫ってくる。

手術着の干されしままに年明くる

寒靄に日輪白くのぼるなり

山茶花や古き家並の八日市

子規も行きし出合堤の初景色

新聞き真白き息を吐きながら

横須賀 大関 不撓

余生句に託して年を迎へけり

こうして心も裕かに新年を迎えられた。

新聞を配る少年の息が白い、では平凡に墮してしまおうでしょう。『真白き』

でこの句は救われている。

黒光りする長廊下冬座敷

明暗のいるいろありし年惜しむ

日輪の匂ひこもるや枯葎

枯蓮や日輪低くたゆたひて

片付きし机辺の冷えや筆始め

冬眠の蛇眼を醒す十勝岳

中七に力ありて、嫌味を感じる余裕を与えないので句になった。危ない。

子の継がぬ農に励みて屠蘇を酌む

自分一代で農業もおわりかな。と一抹の淋しさはあるが、先ずは健康で新年を迎えたことを好しとせねばなるまい。そんな感懐に浸りながら屠蘇を汲んでいる。

湯治場へ妻を見送る小正月

和歌山 井本 友敏

余生句に託して年を迎へけり

こうして心も裕かに新年を迎えられた。

た。

た。

た。

た。

た。

た。

靈山の社で初日拝みけり
御降や三筋かかれる神の滝

茨城 高須 湖城

冬日あり万歩計下げ歩くべし
犬吠の初日を拜む二人づれ

金沢 高桑 與三

露の藁摘みし指先匂いけり
枯草の曠野を征きし日は遠く

岐阜 福井 利子

掌を合せしばし声なき七日粥
昭和六十四年一月七日の朝なのである。

松山 岩崎美代子

黙禱を捧げて筆とる初句会
孤りの燈消して平成元年なり

夜も更けて昭和も終ったのである。
走り根に苔もりあがり梅含む

武蔵野 鶴間 俊子

寒の雨半旗無言を包みけり
傘たたむ女客らし初時雨

金沢 山田 青陽

寒鴉昭和の御代もをはりけり
孫に似し巫女舞ひるや初詣

福島 秋葉 紅風

信夫野の切り干し匂ふ日和かな
葬列の端にかかるや冬の虹

松山 菊地 茂

病癒え蓑虫ばかり見てをりぬ
初句会初心引き締め参じけり

松江 大橋新太郎

庭焚火雪を冠むせて消しにけり
ビル街の半旗に乾く風の音

松山 石丸 綾子

天主ある城の威容や初日の出
山茶花の散りしく庭に帰りけり

『入院中の休暇にて帰宅』とあり。完
全退院される日の早からんことを。

姫路 野村 敬二

擡げくる煩惱あまた除夜の鐘
我が干支の浮ぶ金杯屠蘇祝ふ

仙台 若生 葛匍

寒茜掲ぐ弔旗のうなだれて
餅花やこころばかりの小正月

佐世保 伊藤 達男

屠場に行く牛のトラック十二月
しみじみと喪の明けてゆく根深汁

小牧 栗木 栄三

梅ふむむ納屋のつららは筆して
鷄鳴に憂ひも深し大旦
東京 石井 清勝

先づ陛下の御快癒祈り初日記
薄雲が包む初日を拝みけり

千葉 岡田 正秋

注連飾り喜寿の手で編みあげしもの
機町に弔旗垂れたる小正月

福島 伊藤喜代子

民祈る大内山の初明り
富山 城山 曉舟

松山 渡部 力

平成を迎へる朝の藪椿
平成と改元されて冬の雨

日立 石川みちを

山茶花や北偏りの風吹く日にて
故里のこの道今も笹子鳴く

東京 藤田 路水

春日市 林 藤雄

晩秋の室戸の海風ぐ磯かもめ
野良猫が家に居付きて冬暖し

岡山 三田 久代

久留米 執行みのる

玉野 三村 白柳

葉牡丹に大き針指す花時計

日立 内田 定夫

沼凍てて日ねもす風の音ばかり

横浜 仁尾 久美

病む猫にまぐるを買いし年の暮

石川 松枝 外也

仏心を温め山家の雪に住む

岐阜 松野 啓子

千大根フェンスに掛けてありにけり

前月号補遺

金沢 山田 青陽

結納の品華やかな冬座敷

残菊にまだ寄る蝶のありにけり

茨城 高須 湖城

筑波山浦に映りて化粧ひけり

〇 〇 〇

去年今年 野島 一良

昭和六十三年を送り、六十四年

を迎へる心は一途に

御平安ひたすら祈り去年今年

昭和六十四年一月七日

人日の乾坤たちまち昏かりき

大き喪に服してをりぬ齋粥

平成元年一月八日

天の日嗣たふとかりけり万年青の実

〇 〇 〇

投句締切 毎月十八日必着(翌々月号で発

表)。当季雑詠(季節外れの句でなく)

五句以内。葉書に明瞭な字体。固有名詞

で一般的でないものは註記せられ度し。

宛先 186東京都国立市東二一十二一十六

野島 一良宛



森 武次選

前神奈川 齋藤 信子

薬師寺の兄弟杉樹齡八百年精氣漲り天指し

て伸びる

茨城 高須 行雄

朝霜の木陰に咲きし白き花青き大葉と八手

は強し

〇枯蓮葉続く好天恵まれし師走の蓮を精出

して掘る

〇寒空に月の光の白じらと八手の花は白く

佇む

千葉 岡田 正秋

晩酌の肴に連想テレビ見る冬至も近く陛下

如何にと

肌にふる柚子の香けむる冬至風呂喜寿に余

命は神のみぞ知る

病む妻に付添ひ暮れし元旦に看護の白衣尊

く映る

宮城 渡邊 正之

大君の平癒をねごふ国民は今朝も列なし寒

参りする

卒業の記念に植ゑしいぬ槐喜寿に伐られて

床柱となる

床柱眺めてわれは早や傘寿延寿輝けわが家

榮えよ

〇注意・文字は正確に。

前東京 横山 三郎

三十四年無事故でありし免許証老いて事故

なき前に棄権す

〇アザレアのピンクに咲きし色に似てけさ

の朝雲美しく呀ゆ

映しゐるテレビ中国の市場にて天秤の肉に

人らむらがる

前東京 坂 美貴子

容赦なくひねもすなりくるベルの音凶器の

如しと受話器又とる

○もはや身に赤き色物つけぬ年赤き目ざまし枕辺に置く

夫婦とは見えなくなりし吾が夫の遺影は若く笑み湛へをり

東京 石橋 松茂

○水墨の菊を描きし通信講座二重丸あり老いてもうれし

ねち巻きの骨董近き柱時計我油さして刻む音聞く

文化祭「待ってました」の掛声す八十翁の眼かがやけり

東京 松田千代子

○時刻む音変はらねど茶をいれし湯気のみこうに夫の影なし

前神奈川 大関 民雄

全大統領謝罪声明聞きにけり栄枯盛衰この世の習ひ

前岐阜 松田 要二

夕茜金波はきらめき帆に映えて錦楓の彼方筑波山聳ゆ

岐阜 松田 要二

古稀近き定年もなき妻にして米かしぐ手に夕日はさすも

高知 浜口 義夫

そうそうと流れてつきぬ吉野川巨岩の如き男の子たるべし

高知 古谷 進

てつせんのうす紫の六弁は朝の冷気に凜と張りたり

高知 弘瀬清一郎

春秋のうつろひさへやことごとにあやしきままに年逝かむとす

高知 和田 稔

山峡の速瀬荒滝水瘦せて古歌偲ばする落葉しがらみ

高知 鈴木 護

狭庭への南天の実のいつ知らず熟れみて秋の深み思ふも

高知 森下 剛

朝日さす御垣の内の片隅の寒椿はや日毎緋を増す

高知 別役 重具

○凧にたち向かひたる蟋蟀の骸やあはれ初霜の中

高知 浦田 信

山間の社の庭は人満ちて太鼓の響き止む暇もなし

高知 中田 憲秀

ワッショイとかつぎいでたる若きらの御輿もろともとどろの滝に

岡山 佐々木保男

傘寿ちかきよはひなれども憂ふる日々すめらぎのみこと病みて久しく

宮城 高橋 覚

画面ひしと見つむる

○百余日戦ひつづけし大君は帰ることなく神去りにけり

大君の神去りませるを天もまた悼みて今日も小雨そぼふる

平成と改元されてわれは今明治を算へ四元生き抜く

千葉 植弘 親孝

小春日に昼間は脱ぎしオーバーの襟立て急ぐ夕暮の道

○すめらぎの御平癒只管祈りつつ賀状書く手の進まざる日日

激動に生きられし大君神去りぬ御霊安かれと唯祈るのみ

山梨 雨宮 茂

波瀾多き昭和をおくり平成を迎へんとす

吾はとまどふ

昭和から平成となりし今朝も又孫等は昨日と同じ歌うたひをり

岡山 三田 久代

小春日の時雨にぬれて二十分待ちわびて見し龍巻の噴湯

高知 中平 憲白

めざむれば師走なかばに初雪の積りてうれししばし見とるる

○南天に初雪積みて赤き実とまみにすがしや朝の狭庭辺

長崎 荒木あけみ

病む吾の買求めたる食べものも底をつきたり独り暮しは

神奈川 大関 民雄

シエワルナゼソ連外相来日す北方領土も議題とせしが

宮城 若生 活穂

買ひ初めし孫の景品風の絵は橋弁慶の岩井半四郎

福島 五十嵐善一郎

身を棄てて臣救はんの御心が天に通じて国の栄ゆる

東京 横山 三郎

○玉砂利をふみつつ行きし記帳所に道たつ

ねつつ来し老婆あり

百代の過客と言ふか人逝きて給ひし辞書の

日付追ふなり

東京 石井 清勝

しみじみと皇居へ向きて黙禱す悲しき今朝のニュース聞きつつ

○悲しみが癒えざるままのひと日過ぎ平成

時代の幕は明けたり

激動の昭和へ思ひこらしつつ昨日と同じ星

を見つむる

東京 石橋 松茂

庶民的世継ぎの御子の世となりぬ平成元年思ひも新

東京 勝又 正弘

○紺碧の空限りなく澄みにけり富士の冠雪朝日に光る

古里の文化に触れて楽しかり秋の一時老母

と見るなり

前石川 高桑 與三

失ひし機能おぎなふとワープロにうち込み日々が明るくなりぬ

◎北満の官舎の庭のコスモスに別れ征きたる日もはるかなり

島根 長岡 利勝

御大典に献上の香炉作りたる吾は歎かふ天皇崩御に

○御大典の観兵式受けし兵われも騎馬の天皇も尚若かりき

◎海征きて山征きていのち惜しまざりき今

生きて「平成」の世に会はむとは

前岡山 三村 白柳

粗大ゴミ出せば算笥の小引出七円葉書ばら

ばらと落つ

岡山 三村 白柳

日の丸に喪章をつけて軒先に半旗掲げて吾

れは喪に伏す

激動と苦難の半生亡き陛下靈安かれと祈る

国民

福島 伊藤喜代子

相模路を越えて子よりの鞍葉季節忘れず母

を思ひて

はるばると送りし餅を棒に刺しどんどやき

する孫を想ひぬ

小正月郷の袖山遠ければ庭の植木を切りて

飾りぬ

兵庫 泉 美冨

窓口にて平成元年とおもむろに記すペン先

やや固くなり

東京 坂 美貴子

○吾子寄せし天壤無窮の年始昭和六十四年元旦

雲低く心沈める元旦に天壤無窮葉書受けと

る

御悲しみ秘めて逝かれし御遺影の御面に潜

む莊嚴なる美

茨城 西野宮武男

媼と娘が寄り添ひ手を合せゐる長谷観音寺の鐘ひびくとき

神奈川 斎藤 信子

狭庭辺の名残りの紅葉散りゆくを師走暮れゆく窓に惜しみつ

新玉の年の初日に狭庭辺の梅の蕾は紅ふふみけり

石川 高桑 與三

崩御の報ききし朝よりぞ涙にしつむ一日なりしか

○熱誠の吾等のいのり叶はずて天皇陛下かくれ給へり

われらには八神去りましし大君ゞぞ昭和はとはに過ぎゆかむとす

◎選後小記

○今月は、四四名・一四六首のうち、七八首を採った。高桑與三、長岡利勝両氏の各一首を秀歌として推した。

○原稿は、前々月の十八日迄、直接左記選者宛毎月一回であるが、新年号又は連休の場合等編集の都合等臨時発生し繰上げとなることがあるので早目に着希望、又その場合には悪しからず御諒承下さい。

◎平成元年短歌教室開催案内

六月十一日(日) 正午より。会場、偕行社(千代田区九段南四一三三七。J R市ヶ谷駅下車又は地下鉄有楽町線市ヶ谷駅下車五分。靖国通り、京樟、魚勘の間の道路を東郷坂入る、電話〇三(二六三)〇八五一三)。二階和室菊の間。詠草一首(葉書) 五月三十一日迄に選者宛。会費二千五百円(昼食代を含む)。出席希望者は必ず葉書にて選者宛申込まれたい。

記

④ 24川崎市多摩区西生田三一二三一二三

森 武次宛

選者詠 信濃路の旅(二)

去り難き絵島の墓と別れ来て坂を下ればいかづち聞ゆ

黄昏に時雨の雨は通り過ぎ高遠の灯も闇も優しき

向う谷に陽かざりしより時や経し高遠の灯は明くなりたり

はらはらと桜紅葉は墓の辺に湖衣姫絵島供花一つなし

飼主と話をすればすぐ吹ゆるやきもちやきのコリーを憎む

枯草を刈れば軍手に長袖にびっしりつきし草の実の知恵

剣の道修めし如く歌の道極めむとして文明の前に

高遠に建ちし絵島の歌の碑に邦子の署名文字の懐かし

目覚むれば剣の上に寝し我か扉を押せば星は冴えたり

武道館に昇段試験に来しと言ふパリの教へ子声を弾ます



大森 風来子選

東京都 石井 清勝

昭和史の隅に小さく僕も生き
三代に今日から生きる仲間入り
妻の味近頃塩気やや足りず
浜に吹く風が昭和を引き戻し

評Ⅱ第一、二句は、作者が昭和の初めから終りまで生き抜いた波乱に満ちた時代をふりかえった述懐である。第三句、妻の味の句は、妻への感謝とともに、自己反省の句とも受け取れる。

広島市 坂井 愁山

改造のモーニングから出た尻尾
財布から出て行く金に消費税
平成は希望を満たす明るい世
国籍を疑うような議員ぶり

評Ⅱ第一句の尻尾のニューモア、第二句はそれで結構と思うが、「ポケットのバラ銭にも付く消費税」としたら、もっと面白くなったのではないでしょう。

久留米市 執行 実

原子炉の上を飛び交う鳩の群
やってないやっつけているのは妻と秘書
消費税蛇に飲まれて四月から
枯葉散る虫もいろいろ生きる知恵

評Ⅱ第一句の発想は面白い。第二句はリクルート事件、こんな言い方をする政治家をあわれむべきか悲しむべきか。第三句、蛇は己の年という意である。

玉野市 三村 白柳

政治家を着て屋台のコップ酒
国会に適任居らぬ法務相
大赦令夢見ただけの目白ボス
集団で地獄見て来たアルメニア
評Ⅱどの句も、たしかな表現と素材も選りぬかれたしっかりとした目を持ってい

佐世保市 荒木あけみ

御冥福祈る国民皇居前
日本列島新幹線の不公平
リゾートの指定陳情知事多忙
鎌首を擡げて狙う選挙戦

評Ⅱ第二句、新幹線の不公平は、日本列島が狭くて長いだけに、面白い発見である

う。第三句、リゾート開発こそは予算確得のかくし玉である。ユニークな発想に軍配をあげたい。

宮城県 若生 勝緒

ペレストロイカ北の領土に曙光あり
御聖徳日本列島ひれ伏して
新たななる勇氣年号改まり

富山県 城山東洋門

ガマ口の腹はペしゃんこ寝正月
春炬燵元気で誓う二号宅
初風呂の肌艶やかに湯気たちて

福島県 五十嵐善一郎

金婚の旅は気まかせ妻まかせ
金婚のおしゃれは心の大掃除
金かかる選挙に魔の手リクルート

山口県 岩政 寛隆

リクルート党略だけの立法院
天誅と切つて捨てたい奴がいる
十円硬貨で松陰の知恵みな買う気

北海道 八木 柳雀

初日の山頂で拝む親不辛
ソ連さえ弔意を表すに日共は
お正月タモリサンマにまたタケシ

岐阜市 松野 啓子

元近衛兵日参をして祈りしに
天暗く長い一日テレビ哭く
大赦とて世直し鮫醒めてくれ

千葉県 岡田 正秋

国会の女将に似合う牛歩術
民主主義これも牛歩の勝手主義
消費税葉書に一円目方つけ

岐阜市 松田 要二

法網にかかるは今日も雑魚ばかり
本丸は何時落ちるやら株の城
四日にて法相につく黒い箔

岡山市 三田 久代

娘来て久しぶりなり二人旅
今上の御崩御聞きて手につかず
平成の元号定まり又涙

神奈川県 内田 昇

明治大正昭和平成四代目
よるこびも悲しみも深し新時代

〈前号 延着分〉

北海道 八木 柳雀

好き嫌い激しビタミン剤頼る
消費税がんびり過ぎて支持ダウン

(選後に) 昭和から平成へ、私の心もまだ

整理できないまま、平成元年を迎えま
した。戦争が終って四十数年も経ち、陛下が
崩御されてから、戦争責任を初めて問いか
ける女党首は、言論が自由なら、なんのた
めに四十数年間も、そのことを言わなかつ
たか、とわが耳を疑いました。

戦争を体験し、敗戦となり、その結果国
民の努力によって今日の平和と経済発展を
遂げた日本を好ましくないと思う人々は、
どうか日本から自分の好きな国へ行つてほ
しいと言いたいぐらいであります。

☆波乱万丈 されど昭和に悔いはなし

風来子

投句は、毎月十八日まで左記へ
〒701-42 岡山県邑久郡邑久町山手 選者宛
(郷友柳壇と明記)

編集後記

◎昭和天皇の崩御に際し、取り急ぎ二月

号巻頭に於て、連盟全会員の哀悼の意を、

謹んで表したところでありますが、本号で
は改めて二編の追悼記事を掲載します。

その一は、連盟相談役草地貞吾先生の昭
和聖代の意義と御聖徳の数々を偲んだ記事
でありましてお互に昭和の御代と共に生き
た我々として惻々として身に迫るものを感
じます。

その二は、扇貞雄先生の、天皇崩御の瞬
間に期せずして噴出した、日本民族の真の
姿を称え、この混沌たる世相を嘆き、その
将来に危惧の念を持っていた人々に何かし
らほっとした安心感を与え得るものであり
ます。但し、例え一握りとは云え、現に天
皇制廃止を声を大にして叫ぶ天下の公党と
それに同調する人があり、又、国事行為と
しての、「大喪の礼」、「大嘗祭(だいじょ
うさい)」に反対する新聞論調を見るとき
安心出来ぬ感も深くします。

◎中村守雄先生の「韓国親善訪問の記」
味岡理事の「世界歴戦者同盟(WVF)総
会参加報告」連盟参与高橋文雄先生の小説
風実録「碧眼の侍」等々を掲載しましたが
紙面の都合で内容の紹介は割愛致します。

帝国陸軍編制総覧

元大正官参謀
井本能男 監修

元防衛庁戦史編纂官
森松俊夫(前篇)

戦史研究家
外山操(後篇)

上法快男 企画

四六判上製皮装
函入り/本文
一五〇〇頁/定
価七〇〇〇円

明治建軍以来の陸軍編制の変遷を七つの時代
区分で概観(編制史概説) ■官衙、軍隊、学校、
特務機関等の編制と主要人事を網羅(中央官衙
は課長級以上、軍隊は聯隊・独立大隊以上の司
令官、師団長、団隊長、幕僚等の氏名を記載)
■戦闘序列を重視した構成で、編制史や戦争史
のダイナミズムを表現する画期的な方法を採用
■常備部隊配備表、平常編制と戦時編制の区分
図など豊富な図表掲載 ■官衙・軍隊・学校・特
務機関別の索引作成 ■本天金使用・美装上製本

最新刊 陸軍オール部隊名鑑

芙蓉書房出版編 郷土の栄誉を担い、国運の隆盛に寄与し
た陸軍部隊総数約一万の詳細なメモリアル! 28000円

秘境西域八年の潜行

西川一三著 TBS放映絶賛の新世界紀行「秘境西域六千
キロ大探険」の原本 上下各3000円/別巻2500円

陸海軍将官人事総覧(陸軍篇)全二巻

上法快男監修 陸軍篇(陸士四十五期迄) 15000円
外山操 海軍篇(海兵五十八期迄) 13000円
全将官及び主要軍人の履歴を年月日迄収録した大資料!

芙蓉書房出版

文京区弥生2-1-1 ☎03-813-4466
振替 東京6-351361 出版目録無料送呈

初回は切手300円で見本誌を送ります。

実物交換会会誌

旧日本陸軍・海軍 実物

軍装品

■出品500点以上 ■定価500円 ■10日発行

戦中の木竹自転車・戦後のジュラルミン自転車
犬養毅(木堂)関係品、特別高価買い受けます。

旧軍隊関係の品物、何でも現金化します

交換誌 檻 樓 "S"係

〒710 岡山県倉敷市鶴形2-5-15
郵便振替口座 岡山6-11331

☎0864-22-9383

郷友

(第三十五卷第三号)
(通巻第四百九号)

発行兼編集人 赤羽根 激
発行所 社団法人日本郷友連盟

〒一六〇 東京都新宿区若葉一
丁目二十一番地
電話(341)四三三八
(353)二三四一・二三四二

印刷所 共同印刷株式会社
振替口座・東京四一七一八七七
定価・一部二百六十円(送料共)

毎月一回一日発行
〒一一二 東京都文京区小石川
の十四の十二
電話・案内台(817)二一一一

機関誌「郷友」購読のすすめ

混沌たる現代の世相を正しい目で直視したとき、日本は之でよいのだと感ずる人は、特殊の目的意識を持つ人以外には居らないと思います。

天皇陛下を中心とする、二千六百猶余年の世界無比たる我が国体の本義とその歴史伝統は、これを在るべき正しい姿で、子々孫々に伝えて行かねばなりません。我が国の永遠の平和と、国民の真の幸福を守り続ける為には、自分の国は自分で守らねばならぬという、国民全部の愛国心とこれを基礎とした国力に応ずる国の守りを固めねばなりません。併し現状は決して安心出来るものではありません。

戦後に於ける極度の教育偏向とマスコミの歪、自由主義と自己主義を履き違えた放縦の横溢は、精神を無視し、己在って人無き、救い難い道義の退廃を招ねいでおります。その結果は暴力の横行、犯罪の増加、家庭の崩壊等々憂慮すべき状態です。

二つとない尊い生命を犠牲にして、今日の日本繁栄の基礎を作った靖国の英霊は故無き他国の内政干渉によつて無視せられ、一端開始された公式参拝すら見送られ、国家護持の実現は何時のことか分かりません。剩

え今や、日本の行った戦争は総て侵略戦争であり、戦死は犬死に等しいとさえ極論する者も現われております。北方領土返還要求も遅々として進みません。

「郷友誌」はこのような我が国の現状と将来を杞憂し、如何にして之を是正し、正しい姿を回復し、子々孫々に伝えることが出来るかを常に究明し、示唆する識者の言を満載して啓蒙普及に努めておる愛国警世の書であります。

郷友連盟の理念に賛同される会員は申す迄もなく一人でも多くの方々購読をお願いする所以であります。

(編集部)

一部 二六〇円 (送料共)
 年額 三、一〇〇円 (送料共)

次の所に振替にてお申し込み下さい。

〒160 東京都新宿区若葉一―21

電話 〇三―三五三―二三四一―二

振替口座 東京四―七一八七七

二部以上、まとめてお申し込みの場合は割り引きの制度もあります。